
exorcism - illusion deity -

森村芥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

e x o r c i s m - i l l u s i o n d e i t y -

【Nコード】

N 7 8 9 5 C

【作者名】

森村芥

【あらすじ】

いたって普通の高校生、嵯峨野京右はある朝自らを悪魔だと名乗る少女に出会う。それから、京右の非現実的な日常が始まった…

Take 1 A new moon

始まりはなんだったのか…今ではもう思い出すことすらできない。それでもその長い廊下を歩む事を止めようとはしなかった。それは自身の意図ではなく…意識とは別に体だけが動いている感覚…

殺せ

頭に響く言葉の意味が理解できずに、小さく脳髓が痛む。それでも足は止まらない。

一定のリズムを崩さない足音を響かせながら、その体は廊下の奥へと進んでいく。

殺せ

それが自分ではない自分だと気がついたのはいつだったか…

多分気がついたときには遅かったのだ…もっと早く…もっと確かにその存在を感じ取っていれば…

何も変わりはいらない

そつ…それに抗う術をもたないのだから、その存在を知っていた所でどうにも出来なかっただろう。

それでも思ってしまった…犯した罪を目にした時…

キガツイティレバト

掌にこびり付く嫌な温かさと滑りを持った液体…赤く…紅く…アカク…それは網膜を侵していく…

この日、少女は…忘れられない夢を見た。

バシッと目が覚めた。珍しい事だと頭を捻りながらも、偶然とはいえ折角にも手に入れた気持ちのいい目覚めを手放す気などない。

「う…うあ」

ぐぐつと腕を伸ばして伸びをしながら、意識とは違って寝起きの体を起こす。辺りを一度見渡してから一度だけ大きな欠伸をついた。暫くそうしていたが、ずつとそんな風に寝ぼけていては学校に遅れてしまうと、立ち上がる。

一人暮らしを始めたのは今年の春。過保護とも言える両親の反対を押し切り、高校二年に上がった今年ようやく許しを得た。

まあ、こうして暮らし始めてみるとわかる苦労も耐えないわけだが……とりわけ苦手なのは、この朝食の用意……実を言つとちゃんとフライパンを持ったのさえ今年に入ってからという俺が、そう簡単に料理が出来るわけもなく……

「ああ……仕方がない……今日もわびしく食パンだ」

自分以外誰もいないと言うのに、知らず言葉が口をついて出た。一人暮らしをすると独り言が多くなるというのは、あながち間違いではないのかもしれない……

朝食の為にだけ購入したトースターにパンを挟みながら、俺はテレビの電源を入れた。朝ということもあつて定番と言つて問題ないであろうニュースが流れている。これと言つて興味があるわけではないが、それとなく情報収集にでもなるだろうと方耳を向けたまま、焼きあがった食パンを口に運ぶ。

嵯峨野京右……知らぬ人間が見れば何の暗号だと思いたくなるこれが俺の名前だった。ちなみに嵯峨野でさかの、京右できょうすけと読む。もっとテストの時に書きやすい名前にしてくれと文句の一つや二つ言いたくなるが、今更なので口にはしない。

「ちよつと早いけど行くか……」

食パンの残りの一切れを口に放り込み、時計を横目で見てから立ち上がる。

家でボーッとしているよりは学校の机に突っ伏して眠っていた方がいいという、何とも変な考えが頭を掠めながらも、俺は家をいつも

の様に後にした。

今となつてはもう見慣れた町の風景。実家から通う時とは違つこの景色が実は気に入つていたりする。同じ町なのだから、なんの代わり映えもしないといつてしまえばお仕舞いだ、まあそれはそれ……ようは気分の問題だ。

学校までの道のりはゆっくり歩いても二十分弱。どこかへ寄り道しても全く問題はない時間ではあるのだが、まだ朝の九時も回っていない事もあり、開いている店なんてコンビニかパン屋……ファーストフード店ぐらいのものだ。

俺はそのまま真っ直ぐと学校へと向かう。同じ事の繰り返しで毎日が進んでいく。それを良しとするか悪しとするかは人それぞれだが、少なくとも今の俺はそれも悪くないと思つてゐる。

だらだらと歩いていても、結局は学校へと無事にたどり着く。そのまま校門を潜り抜け、教室の自分の席へと腰を落ち着け、俺は机に突つ伏した。

今日も何事もない平和な日。欠伸が出るのはご愛嬌。おやすみなさい平穏な日々よ……

一人自己完結し、俺は授業中も睡眠を貪ることを決め込み眠りについていた。

目が覚めると、時間はもう昼休みになつていた。教室を見渡すと、ちらほらと食堂へ向かつてゐる生徒の姿が目に入る。そこで俺もやつと思ひ出したかのように、重い腰を上げた。

それにしても学校の食堂とはどうしてこつも混みあふものなのか……ざわざわと人混みにもまれながら、食料の調達を終える。もちろんのこと座る場所などない食堂を後にするのも、いつもの事だ。

「あ、嵯峨野！」

さっさと教室にでも戻ろうとした所を、知った声に呼び止められた。振り返った先にいたのは、一人の男子生徒。茶色というよりは金髪に近い髪の色のお毛、見間違えることは少ないだろうと思われる友人、東上修斗だった。

「よう、何してんだ？」

同じクラスだというのに見かけなかったから、サボりかと思ったのだが、よく考えてみれば今の今まで寝ていたのだから気がつかなくとも無理はない。

「昼食べてたに決まってるだろ、学校来たらお前寝てるしさ？」

「あー悪い、今日は目が覚めるの早くてな…眠かったんだよ」

ため息混じりにいわれた言葉に、俺は適当に返す。修斗とはこの学校に入学して以来の友人で、まあそれなりに仲良くはやっているはずだ。とは言っても、別に学校の外でまで遊ぶような仲ではないが

……

「じゃあまだ知らないだろうね」

「ん？何かあったのか？」

もったいぶったようなその態度に首をかしげると、修斗は黙ったまま辺りを見渡し、その目のある場所で留めた。つられるようにして俺もその方向に目を向ける。

「……」

図らずとも一瞬その目を疑った。目を向けたその先にいたのは、否が応でも目立つ男の姿。同じ学生服を着ているということで、学生なのはわかったが、あんな目立つ奴がいれば今まで耳に入っていないはずがない。

「フェルデナント・ルーシェ…海を渡った向こうから来た留学生だつてさ…」

いつの間にか目を別の方向へと向けていた修斗が呟く様に言う。見るからに染めたものとは違う青銀の髪に、緑の瞳。留学生だというのだから、それは不思議な姿ではないのだが……見慣れないせいか、嫌に違和感が残った。

「あーあ、嫌だよねえ…ああいうタイプ」

その言葉に俺は何も言わない。修斗が性格上、無駄に目立つ人間が嫌いなのはもう今更のことだし、それをどうこう咎めるつもりもないからだ。

「まあ、僕達には一生関わらないだろうし…どうでもいいんだけどさあ」

どうでもいい割には嫌に突っかかるな、などとは思っても口にしない。修斗はそういう性格なのだ。その上嫌に根に持つタイプなので、こういう時には何も言わないのが一番の得策。

その後に俺達に目立った会話はなく、そのまま予鈴がなった。

今日の最後の授業の終わりを告げる鐘に、俺は伸びをする。今日も特に変わったことなく平和に一日が終わったわけだ。

そんな事を思いながら帰り支度をしていると、見知った顔に声をかけられる。

「嵯峨野くん、ちょっといいかな？」

控えめに問いかけてきた彼女は、折原百々撫。このクラスの委員長でもあり、かなりの優等生で通っている。そんな折原が俺に用があるといえば、教員からの伝言か何かと相場が決まっていた。

「何か用か？」

「うん、これ…先生からんだけど……」

そう言って手渡されたのは一枚のプリント、内容も見ずに俺はそれを鞆の中へと押し込んだ。一応その様子を見届け、折原は俺の席に背を向ける。帰り支度も整い、俺はそのまま教室を後にした。

学校が終わった後、俺はそのままの足でバイト先へと向かう。一人暮らしをするようになってからというものの、親からの仕送りはあるものの、それだけでは少しばかり足りない事に気がついた。これ以

上親に求めることだけは避けたかった俺は、どうにかこうにかバイトを始めたわけだ。

「おはようございます」

裏口から店に入り、俺は見知った顔に挨拶をする。

「おはよう」

返事を返してくれたのは、この店に俺より前から勤めている須川菜月さん。名前だけを聞くとどうしても女の人を想像してしまうのだが、れっきとした男の人。実際に聞いてはないが年齢も多分二十代後半だと思う。ちょっと長めの黒い髪を後ろで一つに束ねていて、昔に事故で見えなくなっただという左目は、今も傷が残っていた。俺はさっさと従業員の制服に着替え、開店準備をしている菜月さんを手伝いはじめる。

店は「Deity」という名のどこにでもあるような、バー…とは言っても若者が好むような少しはしゃれた店だ。そう大きくはない店なので、従業員は三人もいれば大丈夫だろうという程度。

「今日も店長は留守ですか？」

その問いかけに、菜月さんは困ったように頷いた。「今日も」というのはそれが毎日の様に続くから…この店は店長が趣味で持っているようなもので、経営はほとんど菜月さん任せらしい。店長は別にデザイナーという仕事を持っているため、店に顔を出すのはまれだった。

「さて、準備はこれぐらいでいいだろ」

その言葉を皮切りに、今日も店が開店される。

客の流れは少しずつだが、それなりにあった。見知った顔馴染みの客から、始めてくるであろう客まで、その姿はさまざまだが、ゆっくりと時間が流れていく。落ち着いた店の雰囲気は俺はそれなりに気に入っており、仕事も一つも苦ではなかった。

「いらっしやいませ」

カランと店の扉が開かれ、反射的に声を返した俺はその客の姿を見

で一瞬止まってしまふ。男二人に女一人…それ自体は大して珍しくもない組み合わせだが、思わず息を呑んでしまった。

一人目の男はかなりの長身でがたいもよく、身長はおそらく百八十は軽く超えている。二人目の男は身長こそ高くはないが、線の細い落ち着いた雰囲気。最後の女は、長い髪をふわふわと揺らし身長も低く外見だけを見れば幼いというのに、それを感じさせない凛々しさがあつた。何よりもその三人は、髪が綺麗な銀や金…それと同じように透き通るような青い目をしていた。

「…席に案内してもらえますか？出来れば…あまり邪魔されないとこころがいい」

そう顔に見合つた綺麗な声で丁寧な日本語を発したのは、銀の髪をした二人目の男。長い髪の毛は後ろで三つ編みにされている。

俺はその声に急かされるように、三人を一番端の席へと案内した。

「ご注文は…」

とりあえずできる限りの平静を装いながら、俺はいつも通りそう口にする。

「うーん…お二人ともどうします？」

「俺は何でもいい、お前が決める」

メニユーさえ手に取らずに、濃茶の髪の一人目の男が口にする。その言葉に呆れながらも、二人目の男は金髪の女に目を向けた。

「私もシルアに任せるわ…ただアルコールは止めて」

それだけ口にして、女は黙ってしまった。その反応を聞き届け、二人目の男…シルアは俺に目を向けてくる。目の前で異国の人間が流暢な日本語で会話をしている事だけでも目が回りそうだというのに、急にその一人と目が合つて、俺は目を丸くしてしまう。

「じゃあ、僕はベリーニを…その男にはソノラを、その女性にはアルコールじゃないものを頂けますか？」

「かしこまりました、少々お待ちください」

につこりと微笑んだシルアに、俺は頭を下げて戻っていく。その注文内容を菜月さんに伝えると、すぐに菜月さんがグラスを用意する。

それを手伝いながら、俺は三人の方へと目を向けた。

「…珍しいか？」

「え、あ…はい」

それに気がついていたのか、目を向けずに菜月さんが声をかけてくる。少しばかり気が引けたものの、俺は素直に頷いた。

「そうか、まあ…変な偏見は捨てるに越したことはないぞ」

少しだけ笑みを零しながらそう言った菜月さんの意図がよくわからず、俺は少しだけ首をかしげる。そうこうしているうちに準備を終えたのか、菜月さんが三つのグラスを渡してきた。そのグラスを持って、俺は再びそのテーブルへと足を向ける。

「お待たせしました」

そういい、俺は男二人にカクテルグラスを、女にジュースの入ったグラスを差し出した。軽く頭を下げて立ち去ろうとした俺を、思わぬ声が止める。振り向くと女がジッと俺に視線を向けていた。

「これは…何？」

そう言った女に他意は見受けられない。ただ純粹に差し出された飲み物が何なのかを聞いているのだろう。

「え…っと、ただのアップルジュースです…」

だからそう答えるほかになかった。ただのとは言ったものの、この店だけの工夫はしている。ただそれを説明しろという事ではないだろうと、俺はそう答えた。

「…アップル…そう、ありがとう」

そう言っただけで飲み物を飲み始める。それを見届け、こんどこそ俺はテーブルを後にした。

その姿も他の客と同様に暫くして店を後にし、それからはずっと変わった様子もなく、店は閉店の時間を迎えた。趣味で運営している店ということもあり、営業時間は夕方五時から十二時の五時間だけだった。

だからこそ、ここをバイト先に選んだというのもあるのだが…

「お疲れ様、先に上がっていいぞ」

片づけを続けながら、そう言った菜月さんの言葉に俺は頭を下げて
帰り支度を始めた。もう日付は変わり辺りは真っ暗。慣れた事とは
いえ、早く家に帰って眠りたいと思うのも本音なわけで…

「お疲れ様でした、また明日」

「ああ、お疲れ様」

店を後にして、外に出ると冷たい空気が顔をかすめる。時季はもう
十一月半ば、そろそろコートが恋しくなってくる季節ではある。こ
れからどんどんバイト帰りが辛くなると思うと億劫ではあるが、仕
方がないかと俺は帰路を急いだ。

「はあ、はあ…はあ、はあ、はあ…」

吐く息は徐々に苦しいものへと変わっていく。けれどその足を止め
るわけにはいかなかった。足を止めれば彼女を待っているのは確実
な『死』だけだったのだから…いや、もしかするとその逆なのかも
しれない。

死を与えられる側になるか、死を与える側になるか…そのどちら
も彼女は認めたくはなかった。だから今もこうして足を止めること
なく走り続けている。

ずっと逃げてきた…街を涉り、山を越え、海をも渡った。そうして
何も知らぬ土地へ来て…それでもまだ逃げ続けていた。

終わりなどないのかもしれない…安息などありはしない、平穏など
迎えることはできない。それでも逃げ続ける。何を求めているのか、
それはもう彼女自身が見失ってしまった答えだった。

「…っは、はあ…」

息が詰まる。汗が頬を伝った。すぐ背後に感じた気配は、ずっと執
着に自分を追ってきたものだった。

「やっと止まったな…」

一人の男がそう高らかに笑った。嘲笑っているのだろうか…逃げ続ける彼女をやつと追い詰めて嬉しくなったのだろうか…

「これ以上無駄な旅は続けたくないですからね」

もう一人の男が呟いた。『無駄』だというその言葉が胸に突き刺さる。彼女一人の命などどうでもいいかのように…

「諦めて…神の御心に従いなさい」

小さな影が彼女を冷たく見つめた。生まれてくるべきではなかったモノを見るような冷たい瞳で……

そうして彼女は思う、神様など迷信極まりないと…そんなものはイナイノダト……

「…S a v i n g t o t h e S a t a n !」

だから願った、神ではない何かに…聞き届けられないであろうその願いを声にした。助けてくれと…その手をとって欲しいと…

救いを求めた。

「A m e n」

小さな影が手を上げ、彼女の目の前が真っ暗になる。

何かが切れる音がした

目が覚めた。昨日と同じように気持ちのいい目覚めが出来るとは思っても見なかったためか、暫くボーっとしてしまふ。窓の外を見ると、気持ちのいい青空が広がっている。

「……朝か」

呟くようにそう言った後、やつとの思いで俺はベッドから抜け出した。昨日と同じ繰り返しで朝食のパンを食べながらニュースに目を送り、身支度を整える。そうしてまた家を後にした。

そうしてその日も昨日と変わらず、少しばかりの偶然と出会いながら一日を迎えるのだと思っていた。

その姿を見つけるまで……

いつもの通学路、行きかう人々の間をすり抜けながら学校へと向かう。二十分足らずで終わってしまう通学時間、けれど俺は目の端に入ったソレに気をとられてしまった。それはどこにでもあるような小さな公園のゴミ捨て場。いつもならば気にも留めないその場所が何故だか妙に気にかかった。

俺は何かを引き寄せられるようにして通学路から抜け、そちらに足を向ける。よりにもよって朝からそんな場所に行きたくはないと思うものの、どうしてもか足は止まらなかった。

「……」

ゴミ捨て場の前まで来て足を止める。腐臭を防ぐために、いつもは扉が堅く閉じられ鍵がかけられているはずなのだが、今日は鍵がはずされていた。いや、外されたのではなく壊されたのだ……足元に壊れた錠をみつけ、俺はそう頭の中で切り替えた。

ゆっくりとその扉に手をかける。音もなく開いたその奥からはゴミが発するような異臭はしなかった。けれどその代わりに……きつい血の臭いが鼻をつく。

「……っ」

息を呑んだ。足が動かなくなった。目の前に……自分の足元に……あったのは血塗れの人だった。頭の中の思考が止まる。この場から逃げ出したい衝動、動揺、恐怖、頭の片隅にそんな感情が生まれては、混ざり合って止まっていく。

そうしてやっと逃げ出そうとした足を……その血塗れの人につかまれた。

「……!?」

バランスを崩すようにその場に尻餅をつき、引きつった顔でその人間に目を向ける。目が会ったのは、幼い少女だった。

グレイに近い長い髪、それとは対照的なほどに白い肌、無垢な少女のような顔立ち……そして紫色の瞳。

「…あ、あ」

まるで生まれたての子供のように、言葉にならない声を漏らした。死をイメージさせる出血量…弱々しさ、その体には血がこびり付いている。

恐ろしさからか…無垢な少女への同情か…それとも…その救いを求める瞳のせいか…俺は動けないでいた。

「……助、けて……」

泣きそうな声だった。あまりにも辛そうな声だった。伸ばされた手…俺は自分の意思とは反してその手をとる。

その瞬間、彼女は目を見開いて驚く…まるで今まで誰もそうしてくれなかったかのように、初めて手を握ってもらったかのように、そうしてゆっくり…痛々しい体を起こして俺に近づいた。

「……Contract」

消え入りそうな声で呟き、彼女は俺に触れるような口付けをした。

ゆっくりと顔を離し、彼女は小さく笑う。

間近で見た彼女のその顔は…驚くほど綺麗だった。

「…あ」

声が出ない。会ったばかりの少女、しかも見るからに命に危険がありそうな少女にキスをされるとは思っても見なかった。警察なり病院なりに連絡しなければならぬと思うはずなのに、体は一向に動こうとはしない。

「…ありがとう」

そう口にした彼女の声は先ほどに比べて、かなりはつきりとしていた。そういえば、先ほどに比べ顔も青白さがなくなっている。

「……あ、病院に」

やっとの思いで体を動かせるようになった俺は、ズボンのポケットに入れていた携帯に手をかけようとする。が、それは目の前の少女によって止められた。

「必要ないから…大丈夫」

そう小さく声にする。どこをどう見れば必要ないのだろうか、

今まで血だらけだった人間がどうして……

そこまで考えて思考が停止した。ずっと彼女自身から流れていたと思っていた血は、彼女の体から流れているものではなかった。その体には一つとして傷はなく、その血もすでに乾いている。

「……どういう」

まさか目の前の少女は人殺しだともいうのだろうか……そう思っ
ては見るものの、目の前の少女を見て、その考えはすぐに打ち消さ
れる。その真っ直ぐな目は純粹そのものだった。

「……謝らなきゃ、私……このままだと貴方を巻き込んでしまう」

自分に言い聞かせるようにそう言葉にした彼女。俺はその意図する
ところが分からず首を傾げてしまう。

「……信じてもらえない……それは分かってる。でも言わないと……」

ぎゅっと胸の前で手を握り締めて彼女は前を向く。俺と目が合い一
度だけ目を閉じた後、真剣なまなざしを向けた。

「……私は、ある人達に追われています……命を狙われてるんです……
信じてもらえないのは分かってます……でも、正直に……私に分かるこ
とだけを話します」

命を狙われているという言葉に、俺は息を呑む。何でもない少女に
言われれば冗談だと思ったに違いない言葉は、彼女の体にこびり付
いた血が信じさせた。

「私は……人ではないんです」

目を見開いた。目の前にいる……自分と同じ姿をしたモノが人ではな
いと……そう彼女は口にしたのだ。

「……悪魔というものをご存知ですか？……私の中にはその悪魔と呼ば
れるものがあります」

「……悪魔って、そんなの迷信だろ？」

そう口にするしかなかった。そんなものはありはしないと……昔の人
間が作り出した創造の産物だと……教徒でもなんでもない人間ならば
そう思っているはずだ。

「そう……思うのが普通です。でも違う……悪魔はいる……貴方達が目

にしないのは、それを狩る側の人間がいるから……私は、その人達に追われているんです」

その目は嘘を述べているようなものではなかった。それでも信じられるわけがない。

「……信じなくても構いません……ただ一つだけ、お願いがあります」
「願……い……？」

ジッと押し黙った彼女に目を向けたまま、俺はその言葉を待った。

「……今日一日は、外に出ないでください……あの人達に見つかれば、あなたも危険な目にあうことになる」

胸の前で硬く手を握り彼女は真剣にそう口にする。今日一日外に出るなどいわれても、そういうわけには行かない……学校はもう今更間に合わないだろうし、休んでもいいだろうが、バイトを休んでしまつては生活費にかかわる。

そんな嘘か本当かもわからない言葉に従うわけにはいかなかった。

「……分かった」

けれど、目の前の少女がそれで引き下がらないだろうと、俺は口だけでそう約束する。ほっとしたような笑みを漏らし、彼女は立ち上がった。

「……ありがとう、本当に……」

静かにそう微笑んだ彼女はどこか寂しげにそう口にして、俺の横を通り抜けていく。彼女の気配が完全になくなった後も、俺は暫くその場から動けずじつと座り込んでいた。

結局学校はサボったものの、俺は夕方には家を後にし「Deity」に向かった。いつも通り何事もなかったどおり着き、彼女の言葉は冗談だったのかと俺は小さくため息をつく。

「どうかしたのか？」

そう声をかけられ、俺はパツと顔を上げる。そこには不思議そうな表情を浮かべた菜月さんがいた。

「いや、何でもないです…なんか今日変なことあったもんで…」
「変なこと？」

さらっと流そうと思った言葉に、間髪要れず菜月さんが問い返してくる。それで俺は思わず頭を掻くようにして目をそらす。別にその事をいうのが憚られるわけではなく、少しでも心配した自分自身を悟られるのが嫌だった。

「あー…実はですね……」

それでもこのまま誤魔化しているといつかボロが出るだろうと、俺は今朝の事を掻い摘んで話し始めた。

話を聞き終えた後、菜月さんは黙って考え込み始めた。まさか話を真に受けたのではなからうかと、俺は苦笑いを零す。

「……その話、嘘じゃないんだな？」

問いかけられた言葉は予想もしなかったほど、深刻めいた声だった。俺は思わず目を丸くして顔を向けるが、菜月さんは相変わらず真剣な顔をしている。

「…嘘では、ないですけど……どうかしたんですか？」

その様子があまりにも普通ではなかったからだろうか、俺はそれを打ち消すように笑いながらそう返事をする。すると菜月さんは何を思ったか、開店準備をしていたにも関わらず、白い紙にcloseと書き殴り、その紙を店の扉に貼り付けた。

「あの…菜月さん？」

その突然の行動にしどろもどろになっている俺に、真剣な目が向けられる。

「…今日は店は開かない、明日は学校も休みだったな……明日の朝、自宅に帰らせるほうが無難だろうな」

何を言っているのか分からない。あんな話を信じたというのだろうか…あんな冗談だとは思えない話を…

「あの…菜月さん？」

だからこそ、俺はその事を問いかけようとする。けれどその前に…

…来客がやってきた。

「……」

ドンドンと激しく扉がたたかれる。店の定休日は日曜日だけだ…だからこそ開いていると思つて来た常連客か何かが扉を叩いているのだろつ。鳴り止むことのない音に、菜月さんに目を向けるがジツと扉を見つめたまま開けにいこうとはしない。だから、俺がその方向へと足を向けようとした。

「止める」

小さく、静かにとめられる。それは聞いたこともない様な冷たい声だった。睨み付ける様に扉に目を向けたまま、菜月さんは動こうとはしない。その間も音は鳴り止まない。

「でも…」

「……感づいたか…つけてきたのか…どちらにせよこのままここにはいれないか…」

俺に対する言葉ではなかった。独り言のように呟いたその声に、俺は言葉を失う。何がどうしたというのか、激しく扉を叩き続ける客に何かあるというのか…俺には分からなかった。

「…困が必要だな」

ソレだけを口にして菜月さんは自分の携帯に手をかけ、どこかへと電話をかけ始める。

「…俺だ、悪いが困ったことになった…ああそう、大丈夫か？…」

…そうだな、任せる。撒けたら店に…そうだ、ああ…頼んだ」

相手の声は聞こえないため、何を話しているのかは分からない。それでもそれが平穏な事でないのぐらひは理解できた。

「……あの」

「…すぐにいなくなる」

そう言った声とほぼ同時だっただろつか、扉を叩く音は止み、そこにいたであろう人の気配も去っていく。菜月さんに目を向けると、ジツと視線を返された。

「……京右、お前…入っちゃいけない世界に入り込んだみたいだな

…」

俺がその言葉の意味が理解できたのは…もう少し後のこと。

その日は、月が見える事のない新月の夜だった。

Take 2 Satan

イライラしていた。あの日あの時ようやくこの旅が終わると思っていたのだ。それにも関わらず今もまだその存在は彼女の前に立ちただかつていた。

「姫、厄介なことになったみたいです」

部屋の扉を空け、入ってきたのは線の細い男だった。彼女、アーシエラ・シルバニアの護衛として日本にやってきた青年でその名をシルア・ヴァゼリアという。シルアがアーシエラを姫と呼ぶのは愛称を込めているだけで他意はない。

そう、例えば彼女がシルアや他の使徒の上に立つものであるうとも…そこに他意はないのだ。

アーシエラ・シルバニア…その名はこの『世界』に関わりのある人物ならば誰もが知る名前であった。『世界』というのはこの世を表す言葉ではなく、この限られた彼女たちの世界の事。神を信仰し、神の手足となつて悪魔に鉄槌を下す「教会」と呼ばれる組織……アーシエラはその教会総帥。悪を最も嫌い、神を最も敬愛する聖乙女。

悪魔や吸血鬼と呼ばれる存在があつた…それは迷信ではなく、彼女たちの生きる世界においては極当然に存在する…赦しがたいものだった。それを神に代わり始末していくのが、教会に所属する「使徒」と呼ばれる信者達の使命。

最近では態々ハンターだと名乗る者も少なくない。アーシエラにとつてはそれすらも下賤極まりない事だった。

「どうかしたの…？」

問いかけるとシルアはその場にひざまずいて小さく頭を下げた。

「…カルネラが…契約者を見つけたようです…」

その言葉にアーシエラは返事を返さず顔を歪める。赦しがたい…神に仇なす存在が未だこの世に息づいていることが……

「契約者と思われる人物については、目星がつかいましたが…」

「そう…」

ゆつくりと立ち上がったアーシエラは部屋に掲げられた天使のレリーフに手を合わせる。

「全ては神の御心のままに…… Amen」

アーシエラのすべては敬愛する神の為に…それに仇なすものは何者であろうと排除する…それが彼女の誓いだった。

暗い世界…日は落ち黒い空が町を覆っていた。

「姫さん！」

ビルの屋上にてその姿を待っていたアーシエラとシルアは、声に振り返る。そこにいたのはシルアと同様に使徒であり、護衛の一人、ヴィグル・ルグラント。百八十をゆうに超える大男で、その姿はどこか威圧的だった。

「…参った参った……例の契約者をつけてたんだが、邪魔が入ってな」

ふざけた様子でそう口にするヴィグルに、アーシエラは静かに顔を向ける。言葉を聴かずともその意図する所が分かってか、ヴィグルはそのまま言葉を続けた。

「ヴァンパイアだ…しかもそこらの雑魚じゃねえ……夜の姫君さんだ」

「…姫…君」

ヴィグルの漏らした言葉に、あからさまにアーシエラの顔がゆがむ。そこでハツとしたようにヴィグルが口を押さえた。

「すまん、このあだ名は厳禁だったな……フィルネスだ」

そう正確な名を口にする。それでもアーシエラの表情は戻ることなく、歪んだままだった。

「…フィルネス……ずっと姿を見せないと思つたら、こんな島国にいましたか……どうします？姫」

呆れたようにシルアは漏らす。そうしてアーシエラへと指示を仰いだ。シルアやヴィグルにとってはアーシエラの指示が全てなのだ。彼女が殺せと言えは殺し、彼女が生かせといえは生かす。

「…どうするもこうするもないわ……神に仇名すものは何者であるうと排除する……」

「んじゃ、フィルネスを追いますか……」

冷たく言い放ったアーシエラの言葉に、ヴィグルはそつとアーシエラを肩に担ぎ上げ、シルアと共にそのままビルの上を飛び降りるように後にした。その姿を追って……

人のいない夜道を全速力で走りぬける。かすかに覗くその背中だけを追い続けた。

「使徒」と呼ばれる信者達は信じられない身体能力を持つものが多い、それは決して生まれ持ったものではなく、教会によってそうされたものが殆どだった。しかしそれは悪魔や吸血鬼といった者達に對抗しうる唯一の手段でもある。

「使徒」になるという事は、その力を受け入れるということに他ならなかった。それでも限界はある……元々人間の体である器にそれ以上の力を押し込むわけにはいかない。

「ちつ、追いつけやしねえ……」

だからこそ、今現在もその姿を見失わないように追いかけることしか出来ずにいた。

「…Amen」

アーシエラがその背中に向かって、手に宝石を持って掲げ小さく呟く。声と同時にアーシエラの手から宝石が弾丸のように放たれた。気がついたようにその背中へ、目も向けずに弾丸と化した宝石を難なく避ける。

「……変です」

そんな様子にシルアが呟くように声を漏らす。

「どうしたよ？」

「おかしいと思いませんか？どう考えても彼女の力は今の我々を超越している…それなのに差を引き離せないんです…いや、引き離そうとしないんですよ…」

視線は真っ直ぐその背中に注いだままシルアがそう告げる。少しの間だけアーシエラが黙って考え込むが、すぐに目を向けた。

「…困だとも言うの？」

「…おそらくは…噂に聞く彼女がそんな性格とも思えませんが…噂に聞く彼女…フィルネスというヴァンパイアは残酷無慈悲、誰一人としてその心を許さないようなものだと聞く。だからこそその考えに至ったのが今更だった。」

「…分かった、追うのは止めて」

アーシエラのその声に二人は同時に足を止める。そのまますぐに追っていたその背中は見えなくなってしまった。

「…姫、どうします？」

黙ったままのアーシエラに、シルアが問いかける。ヴィグルも黙ってその言葉を待つが、暫くアーシエラは言葉を発しようとしなかった。

「…当初の目的を優先させるわ…ただあのヴァンパイアが関わっているとなると、予定を見直す事が必要でしょうけど…」

「了解…じゃあ今日はおとなしく引き上げるか…」

仕方がないという風にヴィグルは息をついた。アーシエラは黙って空を見上げる。月の無い真っ暗な…嫌な夜だと思った。

あれからどれ程の時間がたっただろうか、菜月さんはずっと押し黙ったままで、俺達の間には目立った会話はなかった。体を動かして

いないせいでいつもより長く感じる時間の流れを、俺は持て余す。

「……きたか」

誰に言うでもなく菜月さんが立ち上がった。店の入り口の方に目を向けるとそこには確かに人影のようなものが見える。ゆっくりとその扉が開かれ、俺は信じられない姿を目にした。

透き通るような銀色の癖のついた長い髪、雪のような白い肌……血のような深い真紅の瞳。その姿は……この世のものじゃなかった。

「……お待たせ、一応撒いておいたわ……私にかかれば造作もないし綺麗に微笑んで見せたその雰囲気は年場もいかぬ少女のようだった。『悪いな……で、厄介な事なんだけども……』」

その女性の頭を撫でる様に笑った後、菜月さんの視線がこちらに向けられる。もちろんの事、話をしていた女性もこちらに目を向けた。目が合つてドキツとする。

「ふうん……君が……」

ゆっくりと近づいてきた女性は品定めでもするように俺に視線を投げかけた。居心地が悪いのではなく、これはそう……きっと恐怖だった。小さく細い女性らしい体……けれどその目の前の女性が恐ろしくてたまらない。

「フィルネス……あんまり脅すなよ、可哀想だろ」

「あはっ、なんだか昔の夏樹見てるみたいで楽しくって」

呆れた様な菜月さんの声で、フィルネスと呼ばれた女性の雰囲気が一変する。年相応のふんわりとした雰囲気変わった。

「自己紹介するわ、私はフィルネス……よろしくね坊や」

そう年も変わらなく見える女性に、坊やと呼ばれる違和感にさいなまれながらも、俺は頭を下げる。につこりと微笑んだフィルネスさんはそのまま近くの椅子へと腰掛けた。

「ねえ夏樹……どこから話すの？全部？」

「……そうだな、とりあえず教会のこと……その後に俺達の事を話した方がいいだろ」

フィルネスさんの近くの椅子に腰を下ろしながら菜月さんが呟く。

理解したようにフィルネスさんが俺に向き直った。

「じゃあ…話してあげましょう…先に言っておくわ、信じる信じないは貴方の自由よ……信じなかったせいで命を落としても私は知らないから」

笑顔だった。まるでどうでもいいというかのような綺麗な笑顔…背筋が寒くなるのを感じずにはいられない。

「この世にはね…貴方が知らない事なんて沢山あるのよ……そう、ずっとずっと昔から…それは続いてきたんだもの…」
ずっと目を伏せ、何かを思い出すように口を開いた。

昔…それは気が遠くなるほど昔の事…神を敬愛する一人の少女がいた。

その少女は神に祈りを捧げ、様々な奇跡を起こし、いつしか聖乙女と呼ばれるようになっていた。彼女は深く神を敬愛していた…それ故、神と対峙する存在を許せずにいた。

それは悪魔と呼ばれる存在達。創造の産物でもなく、迷信でもなく…それは確かに存在していた。悪魔は人を騙し、貶め、呪い、殺した。聖乙女は神に祈り続ける。『神の裁きをお与え下さい』と…『愚かなる者に鉄槌を』と…しかし聖乙女は気がついていて。

神は直接裁きを与える事は出来ぬだと…だからこそ…我々が神の使徒として悪を討たねばならぬのだと……

聖乙女は剣を手に取った。神に仇名すものは我々が討つのだと……同じ精神を持つ信者を集め…聖乙女は『教会』と呼ばれる組織を作り上げる。ただ悪を討つために…聖乙女はその全てを神に捧げたのだ。

教会と悪魔の間で行われた戦争は長く続いた。人々は祈りを捧げ聖乙女の勝利を願い、悪魔達の敗北を願った。

悪魔達の持つ圧倒的な力の前に、教会は幾度も破れる。窮地に陥った聖乙女は、ある時一つの魔術書を見つけた。その魔術書にはこの世のものではない魔術が記されていた。聖乙女は神に感謝する……これで悪を討つ事が出来るのだと……そうして聖乙女は魔術を使い、『使徒』と呼ばれる対悪魔戦闘員を作り始める。

それから戦いは一転した。

圧倒的だと思われていた悪魔達は撤退を余儀なくされ、教会から送り込まれていった使徒達はことごとく悪魔を蹴散らしていった。数年の後、戦いは終わりを告げていた。結果は圧倒的な教会側の勝利。

人々は喜び、聖乙女を崇め、神を崇拜した。

けれど……聖乙女は喜びを見せなかった。聖乙女は言う。

『悪はまだ滅びていない……その全てが潰えるまで……私はこの身を戦いに捧げよう』

聖乙女は言う……

『神に仇名するものは何者であろうと、排除する……それが私に与えられた使命だ』

聖乙女は言う……

『その全ての悪が途絶えるまで……私は剣を置くことはない』

聖乙女の戦いに……終わりがくる事はなかったのだ。この世の全ての悪を討つ……それは不可能だった。けれど聖乙女は神にそう使命を託された。それは……残酷な使命だった。

いつしか……人々は姿を現さなくなった悪魔を忘れ、教会の存在さえもその記憶から消していった。数少なくなった悪魔は教会の手を逃れ、思うままに各地へと散っていく。残った『使徒』達は、その姿を追い戦い続ける。

今も尚……その悪が生き続ける限り……剣を置くことは許されていない。

時計の音が響いた。聞かされた話は昔々のおとぎ話のような短いもの……

「……まあ人間がそう長く生きるわけではないから、聖乙女っていうのは代々教会の総帥に与えられるあだ名だと思うけどね」

あっけらかんとそう言い放ったフィルネスさんは菜月さんが用意したカクテルを、ちびちびと口に含む。

「その……正直信じられませんが、それが本当の話だったとします。もしそうなら……俺が出会った少女は本当に悪魔で、教会っていう組織に本気で狙われてるっていうんですか？」

「そうよ、ちなみ私達も狙われてるわ」

間髪いれずに返事が返ってきた。それは予想外の言葉も乗せて……

「菜月さん達……も？」

「……話してないのよね？」

そう、俺ではなくフィルネスさんは菜月さんに問いかけるように顔を向けた。それに無言で頷く。

「……そう、じゃあ教えてあげる。私はね、教会が悪とするものの一つ、ヴァンパイアよ」

背筋が寒くなった。頭の片隅では冗談や嘘だと思っている自分がいる。けれどそれとは別にそれを真に受けている自分もいた。

「貴方たちがどんなイメージを持ってるか知らないけど、きっと少しばかり違うでしょうね……私達だって進化しないわけじゃないもの……日の光も十字架もににくも、なんの効果もないわよ」

くすくすと笑う。頭の芯がひりひりした。悪い夢でもみてるんだと自分自身を言い聞かせたかった。

「夏樹もね……私と一緒に。今から四十年ぐらい前かしら？……私の血を分けてヴァンパイアになったわ」

「四十……年？」

耳を疑うしかなかった。どう見ても二人ともそんな年齢には見えな

い…けれどフィルネスさんは、迷うことなくそう告げた。だからもう…それが本当なんだと信じるしかなくなる。

「私達の詳しい話はいいの、それよりも…今の問題は坊やよ」

そう話を切り替えられて息が詰まった。少女は言った…巻き込んでしまつと……それが何を示すのか…今の俺にはわからない。けれどそう言った少女の目が切実なもので、それが只事でない事だけは理解できた。

「坊やが出会ったって言う子、その子は多分本当に悪魔でしょうね…一時的ではあるけれど、坊やはその悪魔と契約したことになる」

「契約？」

鸚鵡返しに聞くとフィルネスさんが小さくため息を漏らして、暫く考え込んだ。

「どうかしたのか？」

「んー…ちよつとね、その子普通の悪魔じゃないわ……本来の悪魔との契約は、もっと手順が必要なもの…私は悪魔達の契約なんてそう詳しくないけど……それに悪魔はもっと利己的よ…契約者には利益しか教えないわ」

菜月さんに問いかけられ、悩みながらもフィルネスさんはそう口にする。自分自身で言いながらも納得できない様に頭をかしげた。

「まあ、悩んでても仕方ないし…行きましようか」

「へ？」

急に立ち上がったフィルネスさんに、俺は目を丸くする。ジツと俺を見下ろしたまま小さくため息をついた。そしてそのまま店の入り口まですたすた歩いていつてしまう。

「その子を探しに行くわよ坊や、自分の事ぐらい自分で出来るでしょ？」

その言葉は、俺の拒否権などないと最初から訴えていた。

ずるずると足を引きずる。胸が苦しい…足が重い……立ち止まってしまうそうだった。

「……っ」

空を見上げるが、月は見えない…新月の夜だった。一体いつまでこんな事を続けられいいのだろうか…一体どこまで行こうというのだろうか…気がついたときにはもう教会の追っ手から逃げていた。彼女にはそれ以前の記憶が曖昧でわからない。

ただ逃げなければならぬという事だけはわかった。だからこそ逃げ続けている。安心して眠った事などここ数年なかった。彼女の手をとってくれる人間など……今まで出会ったことはなかったのだ。

「……はあ」

足を止めた。思い出す…この手を初めてとってくれた人の事を……はじめて知った他人の手の温もりを……

初めてのはずなのに…それはどこか懐かしく、泣きそうになるほど悲しかった。今もそう、思いだすだけで胸が苦しくなる。眉を顰めてその場に蹲る。行きかう人々の姿はもうなく、そんな彼女を気に留める人はいない。

「……」

自分自身の手を見つめる。もうその温もりはとくに消え去り、指先は冷たく凍えていた。それでも忘れられずにいる。その一瞬の優しさに縋ってしまったからこそ、彼女は契約をしてしまったのだろう。

彼女の名はカルネラ。教会に追われる前の記憶は曖昧で分らない。ただ自分自身で理解しているのは、己が悪魔だという事と、曖昧な過去だけ…。気が遠くなるほどの長い旅と、使徒との戦闘により疲労したカルネラは無意識に『契約者』を求めていた。

カルネラ自身、自分が普通の悪魔でない事は理解できていた。言うなれば不完全なモノだった。人を陵駕した身体能力や魔術を使うだ

けで、カルネラの体は恐ろしく衰弱する。自分自身の体が支えきれなくなるほどに…

カルネラにとつての契約者とは、その疲労や反動を契約者に受け流す事で軽減するものだった。しかし今のカルネラと契約者との契約は完全なものではなく、カルネラの衰弱はとどまっていなかった。
「……っ」

衰弱をとめるには完全な契約が必要な事はカルネラ自身理解している。無理矢理にでも契約を完了させるべきだった。けれど…

「…だめ…そんなの……」

カルネラは自らそれを拒否した。契約者が背負うであろう苦しみを重々承知していたからこそ、手をとってくれたあの人物とだけは契約を完了させたくはなかった。不完全な契約はいつか自然に切れるから……

冷たい風がほほを撫でた。悪魔と名乗った少女を探す…言うは容易く行つは難し、まさにその言葉通りだった。この町がそう大きな都市出ないことは理解しているが、だからといってたった三人で探すには無理がありすぎる。

「坊や、その子の特徴は？覚えてない？」

その問いかけに俺は記憶をたどった。出会った少女は灰色の髪に紫の瞳…そして漆黒の服を身にまとっていた。けれど覚えているのはただそれだけ…手がかりとしては余りに頼りない。

「…灰色の髪に紫の目、黒の服です」

思い出したまま口にしてみるが、自分でため息をつきそうになった。けれどフィルネスさんは文句一つも言わずにあたりを見渡し、そのまま俺に目を向ける。

「いいわ、見つけてあげる…どうするかは貴方が決めなさい」

一言、それだけを言つてフィルネスさんは一瞬で目の前から姿を消

した。それはまさに消えるという表現が当てはまるほどの早さ。そう…自分の目を疑うほかなかった。彼女はたった一蹴りで宙を舞い上がるようにビルの屋上へと飛躍したのだ。

「…っな」

「驚いてる暇はないぞ…俺達も探そう」

腰が抜けそうになる俺を奮い立たせるように、菜月さんが背中を叩く。その姿に驚いた様子は微塵も感じられなかった。信じられない状況に眩暈を覚える。

「一人先走るなよ…今はお前も狙われる可能性があるんだ」

そう言う菜月さんの後を追うように、俺はその場を駆け出す。今はただその後ろについていくしかなかった。

暫く走り続けるがそれらしき姿は一向に見つからない。見つからないだろうと落胆しかけていたところ、菜月さんが足を止めた。どうやら携帯がなっているらしく、ポケットから取り出した携帯で会話を始める。

「…フィルネスか？ああ…ただだが…って、京右に？あ、ああ…」

何を話しているのかは全く理解できなかったが、不意に菜月さんから携帯を手渡される。どうやら俺に出るという事らしい。俺はそのまま受け取り、電話に出た。

「もしもし、坊や？」

耳に入ってきたのはフィルネスさんの声。俺は曖昧に返事を返す。

「見つけたわよ…どうも大変みたい」

「大変？」

もったいぶった言い方に俺は頭を悩ませる。

「教会の人間に襲われてるみたいね…どうするの？」

悠長な声だった。自分自身は関係のない事だとも言つような冷たい声。

「どうするって…！そんなの」

「助けに行くって事は、契約するって事？もし契約破棄するつもり

なら、放っておきなさい…悪魔が死ねば契約は自動的に破棄されるから』

俺の言葉をさえぎるように続けられたフィルネスさんの言葉に、俺は押し黙った。彼女が死ねば契約は破棄される。それはきつと俺がこの物事と一切関わりをなくすという事…そうすれば俺には平穩が戻ってくるのだ。

『一度でも彼女を助ければ、坊やは教会に敵としてみなされるわよ』突き刺さった。言葉が出なくなる。敵とみなされる…その言葉は俺も危険に巻き込まれるという事をしめしていた。いや、そんな生易しいものじゃなくて…俺も殺されると言ったのだらう。

『坊や…一時の感情は身を滅ぼすわ…ジツとしてなさい』

その声は一転して優しいものだった。フィルネスさんの言うとおり、このまま放っておくのが一番いい選択なのだと思う。だから俺は…そのまま返事を…

助…けて

小さく頭の奥で声が響いた。それは俺が手をとった彼女の声……命を狙われているにも関わらず、俺の心配をしていた少女の言葉。

「…どこですか？」

分かりましたと言うはずだった口は、そう言葉にしていた。何も言わずにフィルネスさんは場所を教えてくれる。そのまま電話を菜月さんに渡し、掛けられた声にも振り向かず、俺は彼女のいるであろう場所へと駆け出した。

駆け出した京右を追うような真似を菜月はしなかった。渡された電話がまだつながっている事を確かめ、耳に当てる。

「フィルネス…お前冗談すぎるぞ」

『坊やさ、夏樹の昔にそっくりよね』

電話越しに聞き取れる声はどこか楽しげだった。フィルネスは須川菜月の事を夏樹と呼ぶ、それは彼の本当の名が夏樹というから…と

うに捨てた名ではあったが、夏樹自身もフィルネスにだけはその名で呼ぶ事をよしとしていた。

「大丈夫なのか？」

『うん、平気よ……教会の人間も一人だし、契約者を得た彼女はきつと強いから』

その声はどこか確信めいていた。だから夏樹もそれ以上は問い詰めない。こういう場合のフィルネスの判断はいつでも正しいと確信していたから……

走り抜ける。人のいない町をただ目的に向かってがむしゃらに走った。どうしても自問自答したくなかった。利益などないのに……この先にあるのは自分に対する不利益だけだというのに……足は止まらなかった。

どうしてかは分からない。出会った少女があまりにも無垢な目をしていたからか……それとも手をとった時の少女の笑みが泣きそうな程に悲しそうだったからか……どちらにせよ自分には関係ないはずだった。

でも足は一向に止まらない。出来ないのだ……放っておけば殺されると分かっている少女を見捨てるなど……出来るわけがなかった。

「……っは、はぁ」

走り抜けた先に見つけたのは地面に蹲った少女と……一人の男。

その男と目が合って、俺は息を呑んだ。見た事がある。その青銀の髪も……緑の瞳も……見覚えがあった。

「……邪魔が、入ったな」

呟いた言葉に弾かれる様に俺は我に返って、少女に駆け寄る。目を見開く少女をよそにその手を引いて駆け出した。フラフラになりながらも少女は懸命に俺の後をついてくる。握った手は……信じられないくらい小さかった。

「…っ、あ！」

足が纏れたのか、少女がその場に倒れこむ。急いで駆け寄って体を起こす。目が合った少女は不思議そうな顔をしていた。

「…て……どうして？」

そう聞かれた。その答えを俺は持っていない。だからそのまま黙り込んでしまう。けれどずっとこうしているわけにはいかないと、俺はもう一度彼女の手をとる。

「逃げられるわけないだろ……」

すぐそこに男がいた。目が合って体が凍りつく……そうして冷めた頭でフィルネスさんの話を思い出す。『使徒』は普通の人間ではないのだと……走ってなど逃げ切れるわけがないのだと……だから言ったのだ。フィルネスさんは……

『助けに行くって事は、契約するって事？』

反響するその言葉に俺は息を呑む。握った少女の手から微かな温もりが感じられた。

『一度でも彼女を助ければ、坊やは教会に敵としてみなされるわよ』
そう分かっている、忠告されてここに来たのだ。だったらその答えはもう決まっている。俺は少女に目を移す。まだ不思議そうな表情をしている少女の手を強く握り締めた。

「……戦ってくれ」

「…え？」

独り言のような言葉に彼女は目を見開く。俺はその手だけを握り締めて少女から目を離し、男を見据える。

「助けに来たんだ…契約が必要なら構わない……戦ってくれ」

まるで男に宣言するかのように俺はそうハッキリと口にした。その言葉で男の顔が歪んだ。俺の事をハッキリと敵だと確信したかのよう……

「でも……」

「このままだったら二人とも殺されるんだろ！」

少女の言葉を遮る様に声を荒げた。そうだ……目の前の男は俺の事を

ハッキリと敵だと認識した…俺を殺す対称だと決定したのだ。だからこそ、そうさせまいと男は俺達の方へと駆け出した。

「私の名はカルネラ……呼んで下さい！」

少女が俺の手を取って叫ぶ。

「カルネラ！俺はお前と…契約する！！」

秒速…数メートルはあった間合いがすぐそこまで詰められていた。

俺はカルネラに言われるまま少女の名を叫ぶ、それと同時にカルネラが触れるだけの口付けをした。

「Contract」

男は目の前。振り下ろされる拳が閃光の様に目を覆い、俺はそのまま硬く目を閉じる。

「……」

衝撃は来ない。ゆっくりと目を開けると、俺の前にはカルネラが立ち塞がり、その細い小さな片腕で明らかに強そうな男の拳を受け止めていた。

「…契約……完了しました」

「…ちつ、運がよかったな」

対峙する二人。カルネラに先ほどまでの弱弱しさは一切感じられず、真っ直ぐと男を見据えている。

「手は抜きません…三手で終わらせます」

そう…カルネラは男に宣言した。

Take 3 Contract

気がつけばじつと外の景色を眺めていた。ずっと暮らしてきた街とは明らかに違うその景色に、アーシエラはため息をつく。故郷を惜しむ気持ちなどありはしない。けれど自分にとってこの町は居心地がいいものではなかった。

「…姫？」

部屋に入ってきて、アーシエラに声をかけたのはシルアだった。

その声には振り向いたものの相変わらず何も言おうとはしない。

「どうか…しました？」

シルアはもう一度問いかける。そうしてやっとアーシエラは首を静かに振った。

「なんでもない…少し、外を歩いてくる」

「え！？あ…姫！？」

言うが早いかアーシエラはそのままシルアの横をすり抜けるように部屋を後にしようとする。当然のようにそれを止めるシルアの手をアーシエラは静かに遮った。

「平気…近くを散歩するだけだから、すぐ帰るわ」

まっすぐとした目を向けられ、シルアは仕方なく頷く。もちろんアーシエラの心配をしない訳ではないが、それ以上に信頼しているだけの事。彼女がそう口にしたのなら、シルアはそれを信じるだけだった。

目の前で繰り広げられている光景に目を奪われていた。それは本当にこの世のものなのか…疑わずにはいられない。カルネラが男に宣言した後、戦闘は開始された。

男の武器はその拳だった。弾丸のように振り下ろされるソレは、触

れるもの全てをまるで柔らかい泥の塊でも崩すように砕いていく。カルネラがさけた事でコンクリートに叩き付けられた拳は、それを粉碎していた。

「……っ」

声も出ない。出せるわけがない。俺にはどうすることも出来ない世界だった。コンクリートを砕いてしまふ拳など、受け止めれば確実にその骨が砕かれるだろう。けれどそれをカルネラは片手で受け止めるのだ。それが彼女が人間ではない事を否が応でも表していた。幾度も振り下ろされる拳、カルネラはそれを確実に受け止めていく。カルネラは言った。『三手で終わらせます』と……まだ彼女は一手目すら繰り出してはいない。図っているのだ……確実に、絶対の一手目を与えるタイミングを……

「……っ」

振り下ろされた拳をカルネラが左手で受け止める。それは一瞬一秒。右手に出来る限りの力を込め、カルネラが男のわき腹を抉る。

「一手！」

「っあ」

反射的に身を引いた男は、そのままカルネラとの距離をとった。確実に男を捕らえたと思ったカルネラの一手目は、男の左腕によって寸前のところで防がれていた。しかしそれを見たカルネラに動揺の様子は……まるで計算内だとも言うように、カルネラは男を見据えていた。まだ一手目なのだ……そう、カルネラには後二手が残されている。

「……っ」

無言のままカルネラが地面を蹴り男との間合いを詰める。数メートルはあったその間合いを詰めるのに必要としたのは、たった一歩だった。

「くっ！」

カルネラの両手が男をつかむ。が、それは当然の様に男の手によってしっかりと捕らえられた。その瞬間、カルネラは地面を蹴り上げ

男の方に重心をおいて、自らの体を宙へと浮き上がらせる。

「……！」

男が気づいたときには遅く、勢いよく宙へ浮いたカルネラの体は、その反動を保ったまま男の胸へと足を振り下ろした。

「二手！」

「つぐ……」

普通の少女の攻撃ならば、男はビクともしなかっただろう。しかし男に一撃を与えたのは紛れもない悪魔なのだ。それを証明でもするかのように男は吹き飛ばされ、地面へとたたきつけられる。

「……これで最後です」

カルネラは言った。『三手で終わらせます』と……

そうだった。彼らにとってこの戦いは殺すか殺されるか……つまりところカルネラの言う『終わり』とは『殺す』という事だった。今更……わかっていたはずなのに、三手目を振り下ろそうとするカルネラの手を、俺は止めたくなかった。もちろんそんな事はできるはずがない……それでも……

「待ちなさい」

その声は唐突に、沈黙を破るように現れた。金の髪をなびかせながら、カルネラとは対照的な白い衣装をまとった少女。

「あんたは……」

その姿には見覚えがある。忘れるわけがない……その外見の幼さを感じさせない違和感……「Deity」に姿を見せた三人組の一人……その少女だった。

「まさか散歩をしていて、こんな状況に出くわすとは思わなかった……」

倒れた使徒と俺達を見比べながら少女は小さくため息をつく。いまだに緊張を解かないカルネラを気にも留めず、少女は背を向け男へと歩み寄っていく。

「……助けるつもりなら……」

その少女の足を止めるようにカルネラが発した言葉。それによって

確かに少女は足を止めた。

「助けるつもりなら…なんだというの？」

振り返ったその少女の顔には、恐怖すら覚える冷たさがあつた。まるで、何事も受け付けないようなその空気にカルネラは言葉を失う。「契約者を見つけたからといって…どうにかなると思っているなら浅はかだわ…、私をあまり怒らせないで…」

静かな声。けれどそれには確かな殺意がこめられていた。しばらく反応がないことを確かめた後、少女は男のそばまで行き、その体を小さな肩に担ぐ。

「……」

固まったように動かない体を俺はどうかその場に止めていた。少しでも気を抜いたならば、その場に倒れこんでしまいそうだった。

「今度あつた時は…必ずあなたたちを排除する…覚えておいて…」
それだけ言葉を残し少女は男を担いだまま、闇の中へと消えていった。

その姿が完全に見えなくなつて、ようやく俺は息をついた。カルネラもどうやら同じらしく、倒れこむようにその場に座り込んだ俺の前にひざをつく。

「大丈夫？」

そう問いかける声は先ほどと打って変わって自信のない、頼りなげなものだった。そのギャップに驚きながらも俺はどうにか笑みを返す。

「…そんなに心配する事ない、戦つたのは俺じゃなくてお前なんだし…」

「違うの…私は…」

言いかけてカルネラは言葉を切る。もちろん俺にはカルネラの言いたいことなど分らない。だからその言葉を待つしかなかった。

「完全に契約を交わしてしまった。だから私にとっての契約者とは何なのか…それによつてあなたが負う苦しみを教えます」

まっすぐとした目。それに一転の曇りもなく、偽りなど微塵も感じられなかった。そう、これからカルネラが言うことは、紛れもない事実なのだ。それがたとえ死の宣告でも……

自分の一回りは大きいであろうその体を、アーシエラは肩から事も無げに下ろす。

誰もいない学校の屋上。カルネラたちから背を向けたどり着いたのはそこだった。ただの夜の散歩のつもりだったのだが、不意に感じたカルネラの気配に、向かわずにはいられなくなりあの場所へと足を向けていた。

「……」

じつとまだ目を覚まさない男、フェルデナントを見下ろしながらアーシエラは考えてみる。アーシエラは二人の供を連れ、カルネラを追ってきた。カルネラを狙っていたということを考えると、フェルデナントも教会の使徒のはず、けれどアーシエラ自身使徒全員を覚えているわけではなく、フェルデナントを見るのもこれが初めてだった。

「話を……聞かないと」

見知らぬ使徒がいることに何の疑問もない。アーシエラが疑問に思ったのは『カルネラを追っていた』という点だった。自分自身でカルネラを始末すると決めたときから、他の使徒へカルネラを追う様にといい任は与えていない。だからこそ、その正体を確かめねばならなかった。

「……う」

「目が覚めた？」

目覚めたフェルデナントの目に映ったのは、月の光とこの町には不釣り合いなアーシエラの姿。あまりの違和感に自分がいまだ夢の中……

あるいは死んだのかと思ってしまう。

「呆けてないで答えなさい」

そんな考えを打ち消すようにかけられた厳しい声。その声でやっと自分自身がまだこの世界にとどまっていることを確かめることができた。

「あ、ああ…目は覚めた」

「そう…それならば問うわ、貴方は何者でなぜカルネラを追っているの？」

質問は簡潔だった。無駄な時間など割きたくないとも言つように、はつきりとそれだけを口にする。

「何者つて…それはこっちの台詞だ。あんたこそ何者だ？」

まっすぐと目を向けるアーシエラに、にらみ返すような目を向けるフェルデナント。

「何者…？貴方は…使徒ではないの？」

自分の耳を疑うような声でアーシエラは問い返す。

「使徒だつて？何だよそれ……悪いが俺はそんなじゃねえよ」

はつきりと答えられた言葉。それを聞いたアーシエラは考え込むように黙り込んでしまった。

目の前の男は『使徒』ではないと言つのだ。それがどういうことを指すのか、アーシエラに分からないはずはない。教会の人間ではない者が悪魔を追っている。それは何かの因縁か、それとも恨みか……それだけなら十分にありえる事なのだ、今更驚きはしない。けれど…フェルデナントはカルネラの攻撃を受けて、なお生きている。それは普通の人間では考えられないことだった。

「……そう、では自己紹介をしておくわ。私の名はアーシエラ…訳あってカルネラを追っています」

アーシエラは自身が教会の人間であることも、その地位すらも口にはしなかった。

「へえ…俺はフェルデナント…まあこちらも訳ありでな……」

フェルデナントも自分のことについて深くは触れようとしなかった。

本当に名前だけを交わす自己紹介。

「貴方もカルネラを追っている……だから一つ提案するわ……」

「……？」

フェルデナントの正体が分からない今、アーシエラにとってそれを見過ごすわけにはいかなかった。

「私と協力しない？カルネラを排除するまでの間……」

だからそう口にした。予想もしなかった言葉にフェルデナントは耳を疑うが、まっすぐと向けられたその目に頷く。

互いの名しか知らぬ二人の間でその日、同盟は結ばれた。

カルネラが話を終える頃には、もう辺りは白み始めていた。

カルネラの話は至って簡単なもの、このまま契約を続けていれば俺は確実に死ぬということ。カルネラにとっての契約者は盾のようなもので、カルネラが負うはずのダメージを受け取ることになる。それは即ち、カルネラが死ぬば、俺も死ぬということをしていった。

「……」

言葉は出ない。例えばカルネラが死に至るような傷を負わずとも、俺の体が耐え切れるであろうダメージを上回れば死ぬことになる。カルネラとの契約を破棄する以外に、生きる道はないという話。

「……私は、今まで一人で戦ってきました。契約を破棄するのであれば構いません……」

はつきりとそう告げるカルネラは、どこからどう見ても普通の少女で、そんな少女が今まで一人で戦ってきたなんて信じられなかったけれど、それを俺は信じざるえない状況を目にしまっている。

「貴方を……巻き込むわけにはいきません」

男の拳を受け止めたカルネラの手は、確かに小さく細い少女の手。自分の身より、俺の身を心配するような少女。

「…俺は」

そんな少女を見捨てることなんて出来なかった。今はただ死ぬという事が実感できていないだけかもしれない。そうだとすると、今俺が出せる答えはそれしかなかった。

「俺は契約を破棄したりしない」

「…でも、それでは……」

物言いたげに顔を上げたカルネラに、俺は笑みを返す。出来る限りカルネラが気兼ねしないように、重荷にならないように。

「もう、決めたんだ……カルネラの手を取ったときから」

そう、立ち上がって手を差し出した。一瞬だけ目を見開いて躊躇するが、やがて恐る恐る俺の手に触れる。

「契約者が盾だつて言うなら、それでも構わない……カルネラが俺の剣になつてくれ」

俺には戦う力はない。だつたら盾になるくらい……耐えてみせる。目の前の少女が……戦うというのだから……

「…はい、ごめんなさい……ごめん、なさい」

泣きそうな声で、顔を伏せるカルネラ。それは多分これから俺が負うであろう痛みを思つてのことだろう。それは同時に、それほどまでに辛いであろうという事を感じさせた。

「ああ……」

大丈夫だと、そう言いかけて言葉は出てはこなかった。

部屋に戻ってきたアーシエラの隣には、フェルデナントの姿がある。もちろんヴィグルもシルアも真つ先にその事をアーシエラへと問いかけた。けれどアーシエラは別段変わった様子もなく、平然と「協力することになった」とだけ伝える。

「…姫……教会の間でもない人に手伝わせるんですか？」

フェルデナントが席をはずし、三人になった時を見計らつたように

シルアが口にした。

「…確かに彼は教会の人間では無いと言っている……けれどカルネラを狙っている以上、放つては置けない」

無論その言葉にはシルアもヴィグルも同感だった。カルネラが契約者を得た今、これ以上猶予といえる時間はないのだから…

「じゃあ姫さん…とりあえずあいつは仲間として対応するんだな？」

「……そんな事は言っていないわ」

冷たい返事だった。はつきりとした口調と目線でアーシエラは言葉を続ける。

「彼は私達と偶然目的が一致しているだけ…別に彼を支援する必要も助ける義務もない…」

「もし彼が死に瀕しても捨て置く…という事ですか？」

続けて問いかけたシルアの言葉も冷たいものだった。当然のように頷いたアーシエラにシルアとヴィグルは安心したように息をつく。

正直な事を言うと、身元も正確につかめない男を仲間にするのは御免被りたかった。

「わかりました…従います」

そう笑みをこぼしたシルアはいつもの柔らかな雰囲気をもっている。いつでも二人にとってアーシエラの言葉は絶対だった。

カルネラは最後まで「Deity」に足を進めるのをためらっていた。自分自身ここに足を踏み入れてしまったら、これからは何があっても恐れている事態が回避できないと思ったからだ。

「…カルネラ？」

その名を呼ぶ京右の声が耳に触れる。甘えてもいいなら甘えてしまいたい。今もこの先もずっと一人で耐え抜いていくのはもう嫌だった。自分自身の事すらいまだ正確に思い出せはしないけれど…少なくとも今カルネラ自身が意識しているのは「普通の人」としての自

分だったのだから……

「……でも私は悪魔なんです」

誰に言われたわけでも、教えられたわけでもない。それでも自分が人とは……目の前にいる京右とは明らかに違う存在だということにはわかっていった。あえて言葉にするなら、それは自分の中にある本能がそう教えてくれるのだろう。

「……死ぬかも……しれないんですよ」

俯いたままカルネラは口にする。

「後戻りできないんですよ……死んだら、何もできなくなるんです」
声は小さく低い。けれど物音ひとつしない夜が明けたばかりの街では、その声ははっきりと耳に届いた。

「……カルネラ、俺は」

「死ぬのが怖くはないんですか!？」

京右の言葉を遮るようにカルネラが声を上げる。京右に向けられた顔は眉が顰められ、目には涙が溜まっていた。本当は頼りたい。本当はその傍に誰かいて欲しい。けれど……そんな事をすればその相手が死ぬのは分かっていた。相手が死ぬことが怖いのではないのかもしれない……相手を失った後、自分が背負うであろう孤独が怖いのかもしれない。

「怖くないわけじゃない……たぶん分からないんだ……」

嘘を並べることもできず、京右は正直にそう口にする。

「……分からない?」

鸚鵡返しに聞いたカルネラに、一瞬言葉を濁すが、はっきりと言葉を続けた。

「今まで平和に暮らしてきて……戦争とか殺人とか、話は聞くけどそれだけで……その実感がないんだ」

生まれたときにはもう平和で、運のいい事に今まで命に関わるような大事はなかった。特に死にたいとも思ったことがなかった京右にとって、その「死ぬ」という事自体が実感としてなかった。

「……だったら」

小さく呟くとほぼ同時だった。

カルネラに視線を戻した京右の顔…そのすぐ横をカルネラの拳が掠める。息が止まるかと思った。普通の自分より小さな少女にされたとしても、驚くであろうそれをしたのは、カルネラなのだ。もちろんその拳を真に受ければ京右は生きてはいないだろう。

「カル…ネ、ラ」

名を呼ぶのが精一杯だった。目の前の少女…先程まで泣きそうな顔を向けていた、折れてしまいそうなその少女が…今は殺気を帯びている。何の訓練もしていない、平和ボケした頭でも分かるくらいぴりぴりとした殺気。

「…怖い…ですよね」

呟いた声。

「動けないくらい…怖いですよね…死ぬのは、嫌ですよね」

最後の最後…呟いた言葉は、苦笑いを帯びた優しい声だった。何か声をかけようと京右が口を開きかけた瞬間、カルネラが一步、二歩後ずさる。

「…あ」

声が、言葉が出なかった。目の前で顔を伏せ、立ち尽くしている少女に何か言わなければと思えば思うほど、言葉が出てこない。

「ごめんなさい……ありがとう」

一度だけ頭をさげ、カルネラは小さく微笑んだ。それはどうみても自分より幼い少女で、頼りない姿だった。

「…私悪魔ですから……役に立たない人は必要ないです」

はつきりと聞こえる声でカルネラが背を向ける。勿論そんな言葉が本心でないことくらい分かっていた。分かっている何も言葉が浮かばないのだ。

「さようなら…キョウスケさん」

言うが早いか、小さな背中では走り出す。

追うべきなのか…追わないほうがいいのか…自問自答を繰り返して分かるはずなんてなかった。例えばカルネラが本心で言っていないかつ

たとしても、「役に立たない」その言葉は酷く耳に残った。追いかけて、カルネラを説得して……けれどそれでどうなる……何もできない自分にカルネラを助ける事なんてできるわけが無い。

「…俺は…」

言葉が続かなかった。握ったはずのその手を離してしまった。

夜が明けた。朝が来ても俺は「Deity」で菜月さんやフィルネスさんと顔を合わせていた。

「…あの子が自分で決めたなら仕方ないでしょ……忘れなさい坊や」
フィルネスさんは当然のようにそう口にして奥の部屋へと入っていつてしまう。多分昨夜寝ていない分、今から寝るのだろう。

「京右」

菜月さんに名を呼ばれ、俺は顔を上げた。目に入っただのはいつも通りの菜月さんの顔。俺は今どんな顔をしているのだろう……カルネラの手を離し……その後を追えなかった。

「お前が気に病むことはない……誰だって死ぬのは怖い、そんなものだろ」

一瞬、菜月さんもそうだったのだろうかと思う。フィルネスさんと一緒にいるという事は、あの教会とか呼ばれる人間達とも対立しているということ、それはあんな光景が日常という事をあらわしている気がした。

「…でも、あいつ」

思い出す。初めて会った時の事を……弱弱しくて、控えめで、少女らしい笑顔を漏らしたカルネラ。

「助けて……って言ったんだ」

助けてと……誰でもない俺に手をさし伸ばしてきた。俺は当然のようにその手を掴んだ。冷たくて小さくて……消えるんじゃないかと思うような手だった。

「…お前は…人として善行をただけだ。これ以上は善行だけじゃ
すまない…忘れたほうがいい」

フィルネスさんと同じ言葉を言う。死にそうだった人を助けた。確かに俺はそれだけのつもりだった。けれど本当はそうじゃなくて、色々な事にまきこまれて、色々な話をきいて…それでも…俺はその手をまた掴んだんだ。

「…わかりました」

けれど口をついて出た言葉はそんなものだった。俺に何ができる…俺は普通の人間で、目立った特技も無くて…何も…してやれないのだから。

スツと…暗かった視界が開けて見たことも無い場所が眼前に広がった。あたりを見渡すと懐かしいようなどこか不思議な気持ちになっていく。けれどやっぱりそこは見たことも無い場所で、そこにいる実感がないという所で、やっとそれが夢なんだと認識できた。夢の中でこれは夢なんだと理解するのは不思議な感じがしたが、何故か意識はハッキリしている。

「カルネラー！」

聞き覚えのあるその名前に、俺は慌てて声のほうへと振り返った。そこにいたのは多分年よりも若く見えるであろう初老の女性と、幼い数人の少女と少年…。その中の一人…見覚えのある少女がいた。灰色の髪を一つに束ねた俺の知っている姿より小さなその姿。

「もう、あんまり遠くに行っちゃ駄目だって言っただろ？」

優しく怒るようにカルネラの頭を小突く。一方カルネラは反省したようなしていいような笑みを漏らす。

「あのね先生、あつちで男の人見かけたよ」

「男の人？」

興味津々とばかりにカルネラが先生と呼ばれた女性のスカートの裾

を引っ張る。

「うん、十字架もつてたの」

その言葉に明らかに女性の表情が硬くなった。今ならなんとなく分かる。その男は…教会の人間なのだろう。

「…そう、ほら皆ご飯にするから家の中に入りなさい」

小さく微笑むと、女性は子供たちを家の中へと押しやった。けれど女性だけは家の中に戻ろうとはしない。くるりと踵を返し、カルネラが指差していた方向へと足を速めた。

そうして女性が暫く歩いた先…男はいた。黒い神父服をまといている。男も女性に気がついたのか、冷たい目を向けた。

「…教会が、何の用？」

先に女性がそう声を上げた。大きくは無いが、その声には小さな殺気が入り混じっている。

「ご挨拶だな……お前も元使徒だろう」

「…あたしは使徒になんてなった覚えない……あたしは、師匠からハンターになる事を学んだんだ」

はつきりとした口調で女性ははき捨てるように言った。男は動じた様子も無く、肩をすくめる。

「まあどちらにせよ、教会の人間であつた事には変わらない」

「…だから何だつて言うの」

女性はいつしか男を睨んでいた。その言葉に男はピクリと眉を動かして、女性に目を向ける。

「何…？本気で言っているのか…？それとももう三十年以上も前の事など時効になっているとでも？」

その言葉に女性は息を飲んだ。思い当たる節があるかのように、拳を握り締めている。

「お前は教会の人間でありながら、フィルネスと松島夏樹…二人を見逃しただろう……重罪だ…聖女がお怒りになられたよ、お前を殺せとね」

聞き覚えのある名前に戸惑いながらも、俺は男と女性の会話から目が話せないでいた。殺す…ただ教会が悪とするものを見逃しただけで殺すというのか？

「…そう、殺すなら殺しなさい…もう十分…生きたわ」

女性の顔には笑みが浮かんでいた。これから死ぬというのに、理不尽な理由で殺されるというのに…

「あたしを殺して…さつさと消えて…あの子達は教会とは何のかかわりも無いでしょう」

「孤児院か…自分が孤児だったからか？」

馬鹿にしたような笑みを浮かべる男に女性は答えない。

「まあいいさ、じゃあ死ぬんだな…Amen」

男は懷から銃を取り出し、何のためらいも無く女性に向ける。逃げることも、叫ぶことも無く女性目は目を閉じた。

「せんせえ！！」

その声と銃声はほぼ同時だっただろうか…声のほうに目を向けると泣き出してしまったカルネラの姿があった。女性もその姿に気がつき、泣きそうな表情を浮かべる。けれどそれだけ…胸を貫いた銃弾により、女性は崩れるように地面に倒れた。

「せんせえ！せんせえ！！」

カルネラがバランスを崩しながらも、女性の傍まで駆け寄る。けれどたどり着いた時には女性はもう息をしていなかった。

「…残念だな嬢ちゃん」

男が感情の無い声でそう口にした。ゆっくりと男を見上げるカルネラ、その目には怒りの感情が滲んでいる。

「さつさと帰るんだな…じゃないとお前も死ぬぞ？」

怒りを通り越し悲しみになったのか、カルネラのめからは大粒の涙がこぼれ始めていた。奥歯をかみ締め、男を睨みつける。そんな事をしてどうなる訳でもない事は分かっていた。それでも…

「うああああ！！」

カルネラは男に飛び掛る。当然子供の力…大人にそれも男にかなう

はずもなく、カルネラは男によって地面へと叩きつけられた。

「…っ」

「たつく、めんどくせえな…」

男はそうニヤリと口を歪ませた。まるで面白い玩具を見つけたかのような顔で…男はそのままカルネラを担ぎ上げて歩いていく。カルネラの意識は昏倒しているらしく、たいした抵抗もしていない…ただその目は、ずっと女性の姿を見ていた。

目が覚めると同時に涙が流れていた。

誰に聞かなくても分かる。あれはきつとカルネラの過去なのだ…カルネラ自身忘れてしまっている過去……契約はまだきれていない。だからこんな夢をみたのだろう。

体が重い…頭が痛い…吐き気がする…全身に痛みが走る。息をすることさえ苦痛……これがカルネラの言っていた契約の代価。

けれどそんな体の痛みより…その手を離してしまった…カルネラが今も感じているであろう悲しみが俺の中に伝わってくる。それが何より辛くて…苦しくて…涙が出た。

その手を…離すんじゃないかった、と……

Take 4 Self-Sacrifice

「なあ嬢ちゃん、お前どこにも出かけないんだな」

そうアーシエラに声をかけてきたのはフェルデナントだった。今その場にはアーシエラとフェルデナントの二人だけ、シルアとヴィグルは朝からカルネラの居場所を探る為、出かけている。

「…その嬢ちゃんというのはやめて」

確かに外見だけを見て取ればその言い方に、間違いはないのだろうが、アーシエラとしてはその物言いは許しがたいものだった。けれどそんな忠告を無視するようにフェルデナントは肩を竦めるばかり。

「お前いくつだよ…」

その問いに答えなかったのはアーシエラ。聞き流すように顔をフェルデナントから背けた。

「勘違いしないで…私は貴方と協力関係にあるだけ…それ以上でも以下でもないわ」

顔は外に向けたまま、冷たい声でそう口にする。当然のようにフェルデナントも薄い笑みをこぼした。二人の間に「信頼関係」などというものは初めからありはしない。互いを利用するだけ…それは当然理解していた。

「嬢ちゃんは どうしてカルネラをそうまでして狙う」

「……」

嬢ちゃんという呼び方を変えるつもりはないらしいフェルデナントに、アーシエラは静かに視線を送る。もちろんそんな事を再度指摘するためではない。

「貴方に話す必要はないわ」

ただ一言、それで会話は打ち切られるかのように思えた。けれどフェルデナントは椅子に腰掛けたまま、口を開く。

「教会……神の代行者として仇なすものを狩る使徒の集まり」

「！」

厳しい視線を送るアーシエラにフェルデナントはニツと笑みを返した。

「ビンゴ…初めて会った時に使徒かと聞かれたからな…まさかとは思ってたんだが…、こんなお嬢ちゃんだとは思わなかった」

「貴方…」

先程と打って変わったように表情と空気が厳しくなるアーシエラ。当然それを分かっているフェルデナントの方は先程と全く変わった様子もなく、椅子に腰掛けたままだった。

「別にやりあうつもりはない…今の俺だと嬢ちゃん一人にやられちまう」

ふざけているのか否か、フェルデナントは両手を広げてけらけら笑う。

「…今の？」

「聞き流して貰えなかったか」

互いに声を荒げる様な事は一切しない。けれどその間に流れる空気は冷たいものだった。ボロをだせば次の瞬間に首を刎ねられていそうな雰囲気。

「…俺もあんた達と同じようなものだ…ただ訳あって今は力の半分も使うことが出来ないんだよ」

さらりとそう口にしたフェルデナントに詰め寄るようなことはしなかった。例え詰め寄ったところで口を割ることはしないだろう。

「まあいいわ…覚えておきなさい…貴方を殺すことなど簡単な事よ」

「上等」

会話はそれで終わりを告げる。アーシエラとしては分が悪い方向で…相手の身元もしれぬまま、こちらの身元が割れてしまった。アーシエラは決してそれを表に出さないが、奥歯をぐつとかみ締める。一層フェルデナントに対する警戒心を強めたまま……

目が覚めた頃にはもう日は昇りきっていた。少しだけ小腹が空いている。それもそのはずだった、時計をみると時刻はもう昼過ぎ…どうやらあの後ずっと眠ってしまったらしいことを俺はやつと思い出した。

自宅に帰らず「Deity」にて朝を迎えることになったのだが、ずっとこうしているわけにもいかない。俺の本職は学生であり、このまま無断欠席が続いたならば確実に両親の元へと連絡がいくだろう。

「あら、おそよう」

部屋を出て店のカウンターまでくると、フィルネスさんが笑顔で出迎えてくれる。けれどその傍のどこにも菜月さんの姿はなかった。

「菜月さんは…？」

「ああ…朝から出かけたわよ、坊やのお陰で私達がここにいることがばれちゃったからね」

皮肉をこめた言い方をされるが、そのとおりなので返す返事もない。それを分かっているのかフィルネスさんはそれ以上言葉を続けることはない。

「…怒って…ますか？」

ただ黙っている沈黙がつらくて、ついそう口に出してしまった。一瞬だけ驚いたような顔を向けたフィルネスさんだったが、すぐに笑顔に戻り首を振る。

「まさか…私達はずっとこんな生活を続けてきたのよ、今更…そんなつまらない事で怒ったりしないわよ」

「……ずっと」

その言葉にどうしてもカルネラを思い出してしまい、俺は視線を落としてしまう。

「…そう、ずっとよ…坊やが生まれるずっと前から…それでもよかったわ…私には夏樹がいたもの」

そう言ってフィルネスさんが浮かべた笑みは、優しいものだった。

ずっとそうして生きてきた…けれどその傍にはいつでも菜月さんがいて…だから平気だと、声がそう言っていた。

「夏樹は私のために全てを捨ててくれた…人としての生も、友人も…家族でさえも…、だから私は夏樹がいればいい…ほかはどうだっていいのよ」

俯いたままの俺に、その声ははつきりと届く。カルネラにそんな人はいたのだろうか…ただ一度でも…全てを捨てて味方になってくれた人は…

「契約…まだ切れてないみたいね」

「え？」

その言葉に顔を上げると、笑みの消えた真剣な表情と目が合った。

「坊やは決めたんでしょう、関わらないと…だったら早く契約が切れないと…困るわね」

契約が切れない限り教会は俺を敵として判断するだろう。いや、もしかしたらもう敵として判断されているのかもしれない。ただ一度でさえ…彼らにとってその行いは罪なのだから…

「でも駄目ね…もう完全に契約しちゃったみたいだし…その契約が切れるとき…それはあの子が死んだ時よ」

息が止まるかと思った。予想していなかったわけではない。初めからフィルネスさんはそう口にしていた。カルネラが死ねば契約は切れると…けれど今、初めてそれを実感した気がした。

「でも恐らく…すぐよ…すぐに切れるわ」

フィルネスさんはどこまで分かっているのだろうか、カルネラを探しに行った夜…出会った一人の少女。明らかに何かが違うあの少女に追い詰められるようなことになれば…カルネラは確実に…

「……」

言葉が出ない。俺は正義の味方でもなんでも無い普通の高校生で…命を懸けてまで、全てを捨ててまで…カルネラを救うなんてそんな踏ん切りがつかない。きつと怖いんだ…命を懸けることよりも…今ある全てを失うことが。

それが分かっているから、きっとカルネラは俺に言ったんだ…その手を離れたんだ。

「暫くよ…後暫くすれば…すぐに全部忘れられるわ」

小さくそう口にしたフィルネスさんの言葉に、俺は何も言葉を続けられなかった。

つけられている…そう感じたのはつい先程だった。恐らくは教会の人間だろう。菜月は小さくため息をつく。予想はしていた事だったが、まさかこんな白昼堂々つけられるとは思いもしなかった。

カルネラを追ってきた教会の人間だが、フィルネスがいる事を知った上でそれを野放しにするとは思えなかったが、その通り。あわよくば菜月とフィルネスも始末するつもりなのだろう。

「……」

見ずとも分かる。相手は二人。たいしたことは無い、たかが使徒だ。聖乙女が相手だというならばまだしも、普通の使徒相手に遅れをとるようなことは無い。そんな事よりも問題は場所なのだ。公道、それも人通りが多いショッピング街。こんな場所で騒ぎを起こすのは御免被りたかった。相手もそんな馬鹿をするとは思えなかったが、早々にこの場を立ち去るのが上策だろう。

思うが早いかな、菜月は人目を避けるように人通りの少ない方向へと足を速めた。無論二つの足音も急ぎ足でついてくる。相手とて隠れているわけではないらしい。

暫く歩いて離れた場所。昼だということにもう殆ど人の姿は見受けられなかった。そこで足を止め振り返る。

「…何の用だ？」

声を掛けると姿を現したのは、シルアとヴィグルだった。

「フィルネスと行動を共にしているヴァンパイア…間違いありませんね？」

シルアの問いかけに、菜月は肩をすくめた。分かっている問いかけるその神経が疑わしいとでも言わんばかりに。

「だとしたら？俺を殺せるか？」

「純血でも無いくせに…二対一でよくそんな台詞を吐けますね」

冷めた口調でその言葉にするシルアには微塵の優しさも感じられない。それはヴィグルも同じだった。使徒として生きてきた彼らにとって悪に与える情など初めからない。

「純潔じゃない…か、まさかお前等、俺がフィルネスに従うだけのヴァンパイアだとも思っているのか？」

「…どういう意味ですか」

菜月が薄く笑みを浮かべる。馬鹿にしたようなその笑いにシルアはいい気分はしない。ただそれよりもその言葉の真意がきになっていた。「従うだけのヴァンパイア」と自分の意思で行動する「従うものではないヴァンパイア」では大きな違いがある。

「俺はフィルネスに血を吸われ吸血鬼になった…確かにそのままじゃあフィルネスに従う者だ。純潔じゃない俺達が「本物」になる方法を知っているか？」

菜月がかけていた眼鏡を外す。裸眼になったその目は赤く染まっていた。否、元よりそれは赤かったのだ。おそらくは菜月の身に着けていた眼鏡によってそれが抑えられていただけのこと。

「まさか貴方は…」

嫌な予感なんてものじゃなかった。それはもうすでに確信。間違いないシルア達が目の前で対峙しているのは本物のヴァンパイア。

「主である者の血を飲む事…それで俺達は従う者ではなくなる」

「っ」

元々人間だった人物にそんな事が出来るわけは無いと思っていた。そんな事は主であるフィルネスがさせる訳はないと…そう、それは彼等のプライドにとって大きな意味を示す。

思い違いをしていた。

この男とフィルネスは元より「主」と「従者」ではなかった。

「俺はフィルネスほど甘くは無いぞ……」
間違いなく、その目から見て取れたのは殺意だった。

朝方から出かけたというのに、その姿はまだ帰ってくる気配すらなかった。アーシエラがそれを気にし始めたのは一時間ほど前。いつもならばもう帰ってきている時間だろう。何かあった……そう考えるのが当然だった。

「帰ってこねえな……あの二人」

「っ!？」

急に背後から声を掛けられアーシエラは驚いて振り向く。そこには当然のようにフェルデナントが椅子に腰掛けていた。

「急に声を掛けないで……」

肩をすくめただけのフェルデナントにアーシエラはきつい眼差しを向ける。けれどそれもすぐ別の方向へと向けられた。考えられる状況は二つ。カルネラと接触しその始末に手間取っている。そしてもう一つ……フィルネスが従う者と接触し、帰還が困難な状況にある。どちらにしても放っておける様な状況ではなかった。

「……二人を探しにいくわ」

さつとその場を後にしようとするアーシエラに、慌ててついていくフェルデナント。

「何？」

「カルネラと接触した場合、俺にも用があるんでな……」
キツときつい眼差しを向けられるが、当然のようにフェルデナントは答えた。納得したのかしていないのか、それ以上アーシエラが止める事はしない。そうして二人は揃って部屋を後にした。

当てもなく探し回るのははっきり言って頭がいいとはいえないが、それ以外に方法が無いのも確かだった。

「嬢ちゃん、何か電波とかねえのかよ」

「あるわけ無いでしょう、そんな便利なもの！」

あれば使うのかと、内心思ってしまったフェルデナントだったが言葉には出さない。十中八九アーシエラならば使うというだろう事が見て取れたからだ。他人からどう見られるかなど蚊ほどもきにしていない。

「だからって当てもなく探すのか？」

「…何かいい案でもあると言うの？」

疑問に疑問で返されて、フェルデナントは言葉を失う。風潰しに当たるほかないのは互いに理解していた。アーシエラとフェルデナント、全く違う性格に意義、けれど互いに思うところは同じ事が多い。「オーケー、風潰しにいこう」

返事もそこそこにアーシエラは再び早足に歩き出した。仕方がないとフェルデナントも黙ってその後を歩く。

こう言うのもなんなのだが、二人の容姿はかなり目立つ。どう見てもそれは外国人のもの…それだけなら構わないのだ。問題は二人が酷く不釣り合いなこと。一方は高校生かそれ以上に見える青年。もう一方はどう見ても年場もいかぬ少女。そしてその二人は似たところも無く間違っても兄妹には見えなかった。

「居心地悪くねえか」

「何が…？」

当然のように視線を感じるフェルデナントが問いかけるが、アーシエラの方には全く気にした様子が見られない。その通り気にしていないのだから仕方が無いのだが。

「鉄の乙女だな…」

ポツリと呟いた言葉はアーシエラの耳には入らなかったらしい。幾度そう思っただろうか、アーシエラは感情を表に出さないというよりは自分を出さない。フェルデナントにはそう見て取れた。それは絶対に崩れることの無い防壁にも見えて、ガラス細工の様に脆くも見える。その危うさこそがアーシエラの人を引き付ける魅力なのだ

ろうと思う。

「…いた」

独り言の様にそう言葉にしたのはアーシエラ。一瞬にして意識を切り替えたフェルデナントもアーシエラが見つめる方向へと視線を送る。互いにかかる言葉など無く、どちらとも無く駆け出す。人通りが見るからに少なくなっていく細い道を駆け抜ける。それはただの少女のものではなかった。そうして思い知る、アーシエラが使徒とせずば抜けている事を…

突き当たりの角を曲がる　　そうして辿り着いた。

「
」

血の臭いになど慣れた。その赤い色も見覚えがある。だから焦ったりなどはしない。だから息を飲んだりはいしない。だから恐怖を覚えたりなどしない。

「…ヴァン…パイア」

そう言葉にする。それで幾分か自分を取り戻せたような気がした。血の赤が目奥まで染め上げる。地面に伏す顔には見覚えがある。シルアとヴィグル…アーシエラと共にこの街へとやってきた使徒。その体は赤く染まり、ピクリとも動かない。そんな中立ち尽くす男の姿。

「…使徒か」

その手は赤く染まっている。武器などもっているはずもない、そう二人の使徒は武器も持たぬ丸腰の一人の男にやられたのだ。それは目の前の者がヴァンパイアだから…「従う者」などと…呼べようはずもない。

「神に仇なす者は…何者であろうと排除します」

言い聞かせるように呟いた言葉。それは鎖であり盾であり剣。菜月にけしかけ様としたアーシエラを止めたのは、フェルデナントだった。

「馬鹿言ってんじゃねえ、分が悪いのは火を見るより明らかだろうがっ!？」

フェルデナントの言葉は理解できた。それでもそれに背を向けることはアーシエラにとって許しがたい事実。

「逃げたいのならば一人で逃げなさい」

はき捨てるように言い切ったアーシエラに、フェルデナントは頭を抱えそうになる。優劣の区別がつかないほど馬鹿ではない。これはアーシエラにとつての存在意義にかかわるのだ。それは分かる。分かるが理解は出来ない。自分の為に、自分の為だけに生きてきたフェルデナントには理解できるわけも無かった。

「くっそ、わかんね嬢ちゃんだなっ！！」

仕方なくフェルデナントもアーシエラと同じように菜月に向き合う。一瞬だけ、アーシエラが目を疑ったような表情を浮かべた。

「分が悪いと…そう言っただけね」

アーシエラがハッキリと、この場にいる誰もが聞き取れる声で言う。「たかがヴァンパイア一人…私一人でも排除できるわ」

手を掲げる。静かに風が舞う。その手に握られていたのは、一振りの剣。

「お前は」

菜月が声を漏らす。白い法衣、金の髪、青い瞳、一振りの聖剣：

「聖乙女」

「Amen」

言葉とほぼ同時にアーシエラは剣を振りかざして飛躍する。気がついた様に菜月は後退するが、振り下ろされた剣は更に空を切り、菜月に向かって襲い掛かる。少女の姿に不釣り合いな大きさの剣。いや、少女が小さいせいでそう見えるだけかもしれない。

「これは、俺が不利か」

呟くようなその声と共に、菜月はその場から高く飛躍する。はるか上空、人であるアーシエラに追うことは不可能、そう思われた。けれどその姿を追うように、アーシエラも飛躍する。

「逃げれると思わないことね」

振り下ろされる剣。紙一重でそれを避けた菜月は地面へと舞い降り、

一度だけ舌打ちをしてフェルデナントの隣をすり抜けた。そしてそのまま公道の方へと走り去っていく。当然のようにその後を追うアーシエラをどうにか止めたのはフェルデナントだった。

「放して！」

「馬鹿言うな！むこうは公道だぞつ、捕まりたいのか！？」

酷い剣幕でそう怒鳴りつけられ、アーシエラはやつと我に返る。それと同時に、手に握られていた剣はすつと姿を消していた。

「この二人…まだ息があるみたいだぜ…」

そういつてフェルデナントが指差したのはシルアとヴィグル。使徒と言えど、あまりに深い傷を負い、血を流しすぎると死に至る。今は二人の手当てをするのが先決。それはアーシエラにも理解できていた。

「…二人の手当てを…するわ」

小さく呟かれた言葉に、フェルデナントはやつとの思いで息をついた。

二人の傷は浅いとは言えるものではなかった。それでも命を取り留めただけでよしとするほか無い。二人を手当てし終え、アーシエラは黙って外の景色に目を向ける。自分は何をしているのかと、この街に来てからずっと思うような行動が取れていない。それは酷くいらだたしく、同時に焦りを生んだ。

「寝ないのか、嬢ちゃん？」

その声にアーシエラは静かに振り返る。そこにはもう見慣れたフェルデナントの姿があった。

「貴方こそ…寝ないの？」

「別に、俺は大して力も使ってねえし…嬢ちゃんは疲れただろ」

それがさも当然の事のように口にするフェルデナントに、アーシエラは言葉を失う。アーシエラの聖乙女としての力。それは確かに人

の体を持つ彼女にとって酷くつらいものだった。けれどそれを口にした覚えは無い。

「どうして…？」

だから問いかけてしまう。その意図を確かめてしまう。

「…別に理由なんてねえけど、なんとなくだ。高い能力にはそれなりのリスクがつきもの…何のリスクも無くそんな力を使いたい放題ならカルネラなんて話にならないはずだからな」

何も考えていないようで、見るところ、聞くところは聞いているらしい事に、少なからず感心してしまう。フェルデナントの言うとおり、アーシエラの力は自由に使えるわけではなかった。その力の強さに伴うように、それはアーシエラの力を体から奪っていく。だからアーシエラは普段、その力を自分自身をタンクの様にして蓄積している。いわばアーシエラの力は湧き水の様なもので、次から次へと湧き出てくるものの、その量は少ないものだった。そうして貯めておかねければすぐに底をついてしまうのだ。

「早く寝るんだな…じゃなきゃ、その剣も振るえなくなっちまう」

そう笑みを浮かべて、フェルデナントは自室へと戻っていく。その背中に視線を送りながら、アーシエラは更に消せなくなっていた…

フェルデナントに対する不信感が…

電話が鳴っている。それに気がついたように細い腕が受話器を取った。

「もしもし？」

「俺だ…暇してるみたいだな…いい気なもんだ」

その向こうから聞こえてきたのは笑いを含んだ男の声。それに気分を害したのか少女は声を低くする。

「何よ、何の用もなくかけてきたなら切るわよ…私はあんたの声すら聞きたくないんだから」

「そう言うなよ、お前の行動が遅いからそっちに向かえって言われてるんだ」三日中にはそっちに着く事になってる」

その言葉に少女は受話器を落としかけた。信じられないというように頭を抱えてしまっている。

「嘘でしょ……こっちは厄介な事になってるって言つのに……」

「厄介？何か問題でも起こったのか？」

少女の言葉に興味をもったのか、男が食いついてきた。

「カルネラが契約者を得たわ……後はフィルネスと従う者もこの街に……」

「そいつはいいねえ……面白い事になってるじゃねえか」

「面白い？あんた正気？神経疑うわね……全部私たちにとってはマイナス要素ばかりよ……カルネラの契約者がフィルネス達と関わりあるようだし……」

はき捨てるようにそう口にした少女の反応が気に入ったのか、男は笑っている。

「面白いねえ……実に面白い……けどまあ、いいじゃねえか利用してさっさと目的を果たしちまいな」

「分かってるわよ……居場所も掴めたし……何より……丁度使徒二人が動けない状況みたいだからね……」

そう少女は残酷な笑みを浮かべて電話を切った。

「……急かされるまでも無いわ……アーシエラ・シルバニア……すぐにでも殺してあげる」

言うが早いか、その姿は部屋を後にした。

空を見上げる。星も見えない……いやもう今となつては見えない場所のほうが多いだろう。一人ビルの上でアーシエラは目を閉じて考える。シルアとヴィグルが動けない今、行動を起こすことは得策ではない。けれどこのままカルネラを野放しにしているのは、またその姿

を見失う。それでは駄目なのだ。聖乙女と呼ばれるアーシエラだからこそそれは許せない。ずっと昔から続けてきたこの戦いを終わらせる事、それこそがアーシエラの目的であり、意義だった。

その為にほかの総てを捨ててきた。人はそれを自己犠牲というのかもしれない。けれどアーシエラにとってそれは存在意義そのものだった。神を見失えば、今のアーシエラは崩れてしまう。今までの総てを壊されてしまう。

「……総ては神の御心のままに」

言い聞かせるように呟く。事実それはアーシエラにとってまじないのようなものだった。

自分を見失わない為、縋っているのだ…神に…

「神様なんていないわよ」

その声にアーシエラは振り返る。見たこともない少女だった。一見普通の少女…それもどちらかというと優等生に見える外見。

「…貴女は」

「はじめましてアーシエラ・シルバニア…聖乙女様」

馬鹿にしたように笑顔を浮かべる少女…否、実際に馬鹿にしているのだ。その片手には短刀が握られている。それでアーシエラは全てを理解した。彼女は自分を殺しにここへ来たのだと…

「そう怖い顔しないでよ…あたしは貴女を殺しに来ただけなんだから」

につこりと満面の笑みをこぼした少女には優しさなど微塵も感じられない。

「見たところヴァンパイアでもなんでもないようだけど…死にたいの？」

ただの人間の少女、少なくともそう見て取れた。いくら凶器を手に入れているからと言って、そんな少女に遅れをとるアーシエラではない。気になるとすれば少女が自分の素性を知っていたということ。

「嫌よ、あたし痛いのは好きじゃないの…死ぬのは貴女。あ、でもその前に少しだけお話でもしましょうかー？」

あくまで無邪気にあっけらかんと言葉を続ける少女。何が目的か理解しがたいが、素性が知れない今、下手に手を出すことはためらわれた。

「神様について…」

「…断るわ、貴女のような人間に神を語られたくない」

ハッキリとはき捨てたアーシエラを、さも愉快なものでも見るかのように、少女が目を細める。

「語るも何も、神様なんていやしないじゃない」

その言葉にアーシエラはきつい視線を送った。

「神の代行者：そう貴女は言うけど、そもそも本当に神なんているのかしら？実際に見たこと、会ったことがあるとでも？それとも人の前に姿をさらすなんて真似はしないほど崇高なもののかしら？」
「……」

アーシエラは答えない。無論少女もそんな事は分かっている。

「それに神は本当に貴女が言う悪を悪としているのかしら？」

「…なん、ですって」

「だからー、貴女が悪とするのはヴァンパイアや悪魔達の事なんでしょう？けど神は本当にそれを悪と定めてるの？殺戮を繰り返す人間と、何もしていない悪魔：それはどっちが悪なのかしら？」

無邪気な少女の笑顔に対して、アーシエラの表情が固まる。ずっと昔：アーシエラが戦うことを決めた時、悪は「悪」でしかなかった。けれど今は…？その全てが悪だと何故言い切れる？

「…っ」

考えたこともなかった。自分の信じるものがこんなにも脆いとはじめて知った。アーシエラが信じる悪など…

初めから無かったのだ。

「理解できたー？お馬鹿さん」

少女は短刀を手にアーシエラへと歩み寄っていく。けれどアーシエラの足は動かない。真っ暗になった…ただ少し信じるものが揺らいただけ…それでも…アーシエラは盲目過ぎた。それ以外何にも目を

くれなかったのだ…人間など…「悪」の対象にすらいれていなかった。

「ほんと…脆いわね、あんたの正義」

少女の顔が愉快そうにゆがむ。そして短刀は振り下ろされる。アーシエラの頭上に向かって…

「嬢ちゃん!!」

声と共に、一瞬世界が揺らぐ。アーシエラに向かってまっすぐ振り下ろされた短刀はアーシエラではない者の肩を掠めていた。目が覚めたようにアーシエラが顔を上げる。そこには酷い剣幕をした見慣れたフェルデナントの顔。

「貴方…」

「逃げるぞ」

言うが早いかフェルデナントはアーシエラを抱えて駆け出す。とは言ってもビルの上、逃げられる訳は無いと少女は高をくくっていた。けれどその思惑を裏切るようにフェルデナントはアーシエラを抱えたままビルの屋上から飛び降りる。

「っ!?!」

慌ててフェルデナントの姿を目で追うが、すでにその姿ははるか地上…しっかりと着地していた。

「何…よ、聞いてないわよ!」

想定外だった…あんな男がいる事など…今はじめて知ったのだから明らかに人ではない能力…そんなわけは無い…そうそんな人物は、いるはずが無いのだから。

Take 5 Alone

一人でいることが当然だった…それが当たり前で、自分自身それでいいと思っていた。

けれどどうだろう…今の自分はなんて顔をしてる？情けない…ずっと張り詰めていた自分自身の盾がなくなってしまった。独りが辛いな…なんて…思うはずはなかったのに、その隣に誰もいないなんて当然だったのに…寂しくて死んでしまいそう…

夜の街で、当てもなくカルネラは一人公園のベンチに座り込んでいた。初めて京右と出会った公園。当てもなく、無意識に…そんな筈はなかった。きつとどこかで期待していたのだ…京右が現れるのを…そんな自分に気づいて、情けなくて泣きそうなのに、涙はひとつも出てこない。自分の事をどこか覚めた目で見ている自分がいた。

「……………」

自分で決めたこと…それをすぐに後悔している自分がいる。情けなくて自分が嫌になる…いつそ死んでしまえば楽になるなんて…何度考えただろう。それでも、死ぬことすら出来ない…自分という存在を失うことが怖いのだ。

「私……本当に独りなんだ」

言葉に出した瞬間、涙が出てきた。あれだけ寂しくて悲しくて…それでも出てこなかった涙が、こんな簡単にあふれてきた。誰かに「自分」を認めてほしくて、独りは嫌だと泣き叫びたかった。

「誰でもそうだけどさ…やっぱり他人がいて初めて自分が個人として確立されるのよ」

不意にフィルネスさんが口を開いたと思うと、出てきたのはそんな言葉だった。菜月さんはまだ帰ってくる気配はなく、俺はフィルネスさんと何をするでもなく時間をつぶしていた所。

「どういう意味ですか？」

「哲学… なんだけどね、知らない？ こいついの」

フィルネスさんが笑みを零しながら問いかけてくるが、正直哲学なんてものは学ぶどころか、考えたことすらない。

「例えば坊やは自分の事を自分として認識しているでしょう？ でも、他の人が全員坊やを坊やとして認めなかったら、もう坊やは坊やじゃなくなっちゃうつて事」

「えー… とつまり？」

「簡単に言えば、周りの人が嵯峨野京右を「京右」として認識してくれてるから、坊やは坊や個人としていられるって言う事」

何だか坊や坊や、といわれると頭がこんがらがってくるが、なんとなく言いたい事は理解できたような気がする。つまり、人は一人では「個人」として認められず、他人に「個人」として認められて初めてその存在が確立されるということらしい。まあ言われてみれば、周りに誰もいない状況で、「個人」などと言ってもどうしようもない気がする。

「よくそんな事知ってますね…」

「そりゃ、長く生きてるもの… ずっと昔、退屈な時間はよく本を読んで過ごしたものよー」

外見では決してわからないその実年齢。それでも何と無く分かる… ずっとずっと信じられないくらい長い時間を、この人は独りで生きてきたんだと…

「だからさ… 本当はちょっと心配」

「へ？」

少しか顔を伏せて、つぶやくような声で言う。

「あの子… きつと独りでしょう」

その言葉に次の声が出せなかった。そんな事ぐらいずっと初めから

分かっていた…カルネラがずっと独りだった事も、今も独りだという事も…分かっている。

「フィルネスさん…」

「ん？」

軽い感じで返された返事に、少しだけ心が落ち着いた気がした。

「俺は…どうすればいいですか？どうする事が正しいんですか…？」

その問いに返されるであろう返事は予想ができた。それでも誰かに聞いたかったのかもしれない。

「…それは、坊やが決めること…坊やは坊やだもの、他の人にその意思を決める権利なんてないのよ？」

「……」

俺には両手があつて、両足があつて、ちゃんと何でも自分でできる…いつだってそうだ。決めるのは自分。

「フィルネスさん…俺は……」

少しだけ残った躊躇。だけど、俺は俺の為に生きる事を決めた。

いつからか、空は雲に覆われ雨が振り出していた。

少女に襲われ、ビルの上から逃げるようにして辿り着いたのは学校だった。行く当てが無かったというのが正しい。フェルデナントには身寄りと呼べる人間はただ一人もない。京右の学校へ転入して来た…それ自体が偽りなのである。

色々と下準備は必要だったが、杜撰な管理の中、フェルデナントにとってはそう難しいことではなかった。今までも一人そうしてどうにか生きてきた。だから住む場所もその日任せ、肉親の顔など見たことも無い。

「……」

不意に教室の隅で座り込むアーシェラに視線を移す。この少女はどうしてしまったのだろうか…あの少女らしからぬ覇気と威厳を感じ

られなくなっていた。

信じるものが崩れ去った……ただそれだけの事が彼女にとっては大きな問題。

ずつと信じてきたのだ。神というその薄っぺらい存在だけを……それは元々何も持たず、自分以外信じてこなかったフェルデナントにとつては酷く理解しがたいものだった。それでも、アーシエラにとつてそれがいかに大切なものだったかはわかる。その姿を見ていれば……

「嬢ちゃん……」

呼びかけに返事は返ってこない。

「らしくねえな……文句の一つでも返せよ」

アーシエラの指がピクリと動く。けれどそれだけで返事を返す気配は無かった。

「あんな言葉で崩れちまうような薄っぺらいもん……最初から信じてんじゃねえよ」

はき捨てるようなその言葉。それを耳にしてもアーシエラは声を返さない。ただ……いつも自信に満ちていたその目から、涙が零れた。

「……っ、う」

聞いたことも無い嗚咽。これからも聞くことなんて無いと思っていた。

「……馬鹿じゃねえか」

誰にでもなく呟かれた言葉。その視線はアーシエラからはずされ、窓の外に向けられていた。会話などあるはずも無い。わからないのだ。フェルデナントにとって、アーシエラの気持ちは理解もできない。

どうして、彼女を庇い、こんな場所で二人いるのかわからない。カルネラを殺す……それだけの為に協力していたはずで、今は使徒二人を失って腑抜けになった彼女になど用も無いはずだというのに、その場から離れる気にはならなかった。

「なあ……」

独り言のように……

「頼むから…」

それでもハッキリと聞こえる声で…

「泣くなよ」

それしか言えない。大切なものなど持ったことも無い、これからも持つつもりなどないだから理解できない。でもせめて、その鳴咽だけでも止めたくて、そう口にするしかなかった。

雨が降る暗い夜道に似合わない姿。それを見つけ、足を止めた。

「京右くん？」

「へ？」

声をかけられ振り向いた京右の目に映ったのは、クラスメイトである折原百々撫の姿。もう深夜といえる時間にその姿を目にするのは不思議な感じがした。彼女、百々撫は学校でも優等生でおおっていたはずだ。それが今目の前にいるのだから。

「どうしたの…こんな時間に？」

そう問いかけられるが、どちらかといえばそう聞きたいのは京右の方だった。

「折原こそ…」

「あたしはちよつと用事があつて」

にこりと微笑むその姿に微かな違和感を感じる。

そういえば彼女は京右を「京右くん」などと呼んでいただろうか？自分のことを「あたし」などと呼んでいただろうか？記憶の中にある彼女と、今日の前にいる彼女が上手く重ならない。

「そ、うか…」

どうしてか怖くなった。こんな時間に街を歩いて、薄い笑みを浮かべて、何を…していたのだろうか？

「それより京右くん…京右くんはどうして…？」

「……」

言葉に詰まる。言葉にしてはいけない気がした。

「悪いっ、折原！」

だから逃げるように踵を返して駆け出す。百々撫はそんな様子を微笑みのまま見続けている。

「ばーか」

彼女らしからぬそんな声…思わずそれに振り返ると、歪んだ百々撫の顔が目映る。それと同時に背中から何かにぶつかり、バランスを崩したようにその場に倒れてしまう。

「……っ」

「おいおい、前ぐらいちゃんと見てよね？」

軽い声に振り向くと、そこには見慣れた青年、東上修斗が立っていた。何がなんだか分からぬまま目を見開いて固まってしまう。

「ほんつとに…今日はついてないんだから……」

ゆっくりと足を進めてきた百々撫が、京右の前で止まる。京右を見下ろすその目は酷く冷たいものだった。

「まあまあ、いーじゃん…ねずみが一匹引つかかったんだし…」

おかしそくに笑う修斗。何かがおかしかった。少なくとも京右の知る二人はこんな性格でもなければ、交友関係も無い。

「な、にが…」

思わず口から出ていたその言葉に、二人は視線を返す。

「何がどうしたって？聞きたいよねー聞かないままなんてやだよねー？」

修斗の声が嫌に耳に響く。

「聞く必要なんて無いわよ…だって京右くん…死ぬんだから」

百々撫の言葉の意味が分からなかった。理解する時間など与えてもらえないわけも無かった。気がついた時にはその胸にナイフが突き刺さっていた。

「え……？」

そのまま倒れるようにして体は地面へと崩れ落ちる。雨が溜まって

できた水溜りが赤く染まっていく。

「さよなら」

聞いたことも無いような二人の声が耳に残る。体を起こしたいのに、重くて動かなかった。声も出なかった。

「あ……あ」

生まれて初めて死を間近に感じる。冷えていく体が恐ろしかった。助けてほしいと……そう思った。

瞼が落ちる……それと同時に、意識も途絶えた。

スツと意識が戻り、見たことも無い景色が目の前に広がる。

その感覚を俺は知っていた。そう、これはカルネラの記憶の世界。彼女自身忘れているであろう……その記憶。

「……」

カルネラは暗い小さな部屋にいた。その体にはいくつもの包帯が巻かれている。

「おい」

不意に部屋の外から声がかかけられ、それにビクリと体を振るわせるカルネラ。ここは部屋などではなかった……そう、ここは牢屋だ。

「起きてたか……さつさとこっちへ来い」

扉が開かれると同時に、法衣を着た男が姿を現す。カルネラは黙ってその言葉に従う。ふらふらとした足取りで……それ以外選べる道が無いように。

「これが最後だ」

男がカルネラの手を乱暴に引いてそう呟く。少しでも表情を明るくしてカルネラが顔を上げる。けれどそれを忌々しげに見下ろした男が発した言葉は、その期待を裏切るものだった。

「今回失敗すれば……お前は処分する」

カルネラが連れてこられたのは、一人の少年の前。

少年もカルネラと同じように、体に包帯を巻いていた。暫く見詰め合っていた二人は、やがて法衣を着た男たちによって引き連れられていく。

「一つの力を二つに分けるなど…可能なのか？」

「おそらく…何しろ子供だ…全てを受け入れるには体も精神も幼すぎる」

「だが、万が一成功しても力が半減するのではないか？」

「成長した後、優秀な方に全てをうつせばいいだろう…失敗しても代わりはいるのだ」

小さな子供を引き連れた男達は口々に言葉を交わす。それが何を意味するのか…俺にも、恐らく子供達自身も分からなかった。

「悪魔は…？」

一人の男がそう口にする。それに俺は顔を上げた。

「ああ…聖乙女様が狩って来てくれたよ」

馬鹿にした声でもう一人の男が返す。

「熱心だねえ…神様なんていやしないっていうのに…」

「軽々しく口にするな…どこから漏れるかわからんだぞ」

呆れた様に肩を竦めた男を、もう一人が叱咤する。

「聖乙女派なんて…もう数える程度でしょう」

「だがまだだ…まだ、使徒に対抗しえるこの実験が完璧ではない」

使徒に対抗しえる実験…何のことかは分からないが、少なくとも、使徒や聖乙女に対して友好的でない事は理解できた。

「これが成功すれば…第一号になるわけですか…」

「ああ…悪魔の力を持った、使徒を超える人間だ」

その言葉に耳を疑った。悪魔の力を持った人間？じゃあカルネラは…悪魔にされたっていうのか…？

「では手術を…」

男達は重い扉の奥へとカルネラ達を連れて行く。その後続く勇気が…俺には無かった。見なくとも分かる。実験は成功したのだ…だ

からカルネラは生きている。

けれど…そのすべての記憶を失い…悪魔だと…教会に命を狙われている。カルネラが悪いわけではないのに…一方的な理由で…

そこから意識が飛んだ。再びあたりがハッキリした時に目に入ってきたのは少しだけ背の伸びたカルネラと少年の姿だった。

「おにーちゃん」

カルネラがそう少年のことを呼ぶ。少年は小さく首をかしげた。

二人には元々身寄りが無いのかもしれない。そうでなければこんな場所につれてこられて、騒ぎになっていないはずが無い。だから、カルネラと少年は本当に兄弟のようにも見えた。

「おにーちゃんの髪の色って、きれいだね」

カルネラは自分の灰色の髪を一度見てから、少年に目を移す。少年は確かに綺麗な青銀の髪をしていた。

「羨ましい」

そう照れたように笑うカルネラの頭を、少年は優しくなでる。

「カルネラの髪も綺麗だよ」

褒められたことが嬉しいのか、カルネラは笑みを浮かべた。仲の良さそうなその姿。少なくとも今のカルネラは幸せそうにさえ見えた。けど…

夢の時間はすぐに終わりを告げた。

暫くして二人は引き離され、別々の生活を送った。

それも普通の生活などではない。使徒を凌ぐ兵器として、人を殺す知識や技術だけを学ばされていく。それでもカルネラは少年を兄として慕い続けた。それだけは許されると信じていた。そんなはずはないのに…

数年経って、二人の間に能力の違いが出てきたのか、法衣を着た男が訓練中に言葉を漏らした。

「一号と二号ですけど…どうやら二号のほうが見込みがあるようで

す」

「それで…？今移植して二号は受け入れられるのか？」

「…確実とは言い切れません…ですがゼロではないかと………」

その会話をカルネラは片耳で聞いていた。自分が二号と呼ばれている事も…知っていた。

「…分かった、任せよう」

一拍おいて男はそう口にする。何を意味するのか…カルネラはもう分かる年になっていた。

目が覚める。

まさかさめるとは思っていなかった…確かに俺は折原に刺されて…冷たくなっていく体を感じたはずだったのだから…

「目が…覚めましたか？」

聞き覚えのあるその声に顔を向ける。そこには別れた時と変わらぬカルネラの姿があった。

「間に合ってよかったです…今キョウスケさんに何かあればすぐ分かるんです…だから…」

言葉を聞き終える前に抱きしめていた。驚いたように息を呑んだカルネラを気にも留めず、抱きしめ続ける。

「…よかった、無事で…」

今まで死に掛けていた自分がこんな言葉を言うのは、酷く滑稽な気さえしたが、それでもかまわなかった。今日の前に変わらぬカルネラの姿がある事が嬉しかった。

「キョウスケ…さん」

カルネラの声が震えていた。その顔を見ずとも泣いているのが分かった。だからそのまま体を離すことはしない。互いに傘を差していないせいで、体はぐしゃぐしゃに濡れていたが、それさえも気にか

からなかった。

「ごめん…俺、カルネラの好意無駄にする」

「……」

彼女が精一杯強がつて与えてくれた好意。それを俺は今無駄にしよ
うとしている。それでも気がついてしまった…出会って少ししか経
っていないというのに、俺はカルネラを守りたいと思ってる。

「俺…一緒にいるから、死ぬかもしれないとか…今の生活が全部な
くなるとか…それでも一緒にいるから」

カルネラの腕が恐る恐る俺の背中に回される。

「いいんですか…？」

「ああ…」

返事と共にカルネラを抱きしめる力を強くする。

「…頼つても…いいんですか？」

「ああ…一人で無理しなくてもいい…」

その返事とほぼ同時に、カルネラがしっかりと俺の背中に回す手に
力をこめた。それは本当に…ただの少女のもので…俺は少しだけ安
心する。

「帰ろう…」

「…え？」

少しだけ体を離し呟くように言葉にすると、カルネラが目を見開い
て声を漏らす。

「フィルネスさんも、夏樹さんも待つてくれてる…」

「……」

「帰る場所なら…ここにあるんだから」

言葉を聞いてから、カルネラが俯く。涙を流して、小さく何度も「
ありがとう」と呟いた。

Take 6 Memories

夜が明けた。結局あれからアーシエラが持ち直すことはなく、仕方なくフェルデナントは気の抜けたアーシエラを引つ張るように学校を後にした。フェルデナント達に何かあった事など関係なく、日常は崩れることなく繰り返されるのだから、ずっとその場にいるわけにも行かない。

けれど行く当てなど勿論なく、仕方なくブラブラと歩き回って探し当てた廃墟へと身を置くことにした。

「何してるんだか…」

呟いた言葉は誰に当てたものでもない。あえて言うのなら自分自身にだらう。利用できると思ったからアーシエラと行動をしていた。それはアーシエラも同じことだらう。では何故…今も一緒にいるのだらうかと思ってしまうた。

「……」

泣き疲れてしまったかのようにアーシエラは静かな寝息を立てて眠ってしまっている。

「…俺は」

カルネラを殺すためにこの街に来たはずだった。一度アーシエラに話したことがあるように、今のフェルデナントは完全に力を使えないでいる。少し無理をすれば七割の力を使えないが、そうすると暫くろくに動けなくなってしまう。だからアーシエラと出会った時「丁度いい」と思った。

アーシエラがどこでどうやってカルネラの事を知ったかは知らないが、自分のことは知らない。それならば…利用するしかないと思った。教会の事も使途の事も知らぬ振りを通した。知らぬはずはないのに…

「俺はカルネラとは違う…」

カルネラには記憶の混同が見られる。自分の事をよく覚えていない

ようだ。けれどフェルデナントは違う。すべて覚えている。自分が何者で、何をしなければならぬかを…

「時間が、ないんだよ」

その顔は余裕の無いものになっていた。一分一秒無駄にはできない。けれど目の前の少女を置いていけないのは…きつと予想していなかったからだ。聖乙女と呼ばれる総帥がこんな少女だったと…

「…つく」

ぎりつと奥歯をかみ締める。何時からか…フェルデナントにとって復讐がすべてになっていた。なっていたはずなのだ…

「おはよう、ございます」

小さく控えめな声はカルネラのものだった。こうして朝を迎えるのは…彼女の記憶のあるところでは初めてなのかもしれない。少しだけ照れくさそうに笑っている。

「おはよう」

俺が始めに、その後にくように菜月さんとフィルネスさんもカルネラに返事を返した。ただそれだけで幸せそうに笑っている。そんな顔に俺まで笑みが零れてしまう。時間にすればたった少しだ。走るように時間が駆けていったのは…それなのにこの感覚がひどく懐かしい。

「カルネラ、何か食べれないものとかあるか？」

朝食の準備をする為だろう、菜月さんがカルネラに声をかける。一瞬何を聞かれたのか分からず頭を傾げるが、すぐに首を横に振る。

「だ、大丈夫です！」

「分かった」

慌てて返事をしたカルネラに、笑顔を返す。何だかカルネラを見ていると微笑ましくなってしまう。

「夏樹！あたしは目玉焼きー」

お皿を用意しながら、フィルネスさんが忘れるなよ、と釘を刺している。

「そついえば、フィルネスさんは料理しないんですか？」

「集団食中毒になる」

不意に気になったので、そう問いかけると、横から菜月さんが間髪いれずに返事を返してきた。少し不服そうな顔をするものの、抗議をしないフィルネスさんを見るところ、どうやら言葉に間違いは無いらしい。

「…そう、ですか」

何だか異様に悪いことを聞いてしまった気がしてならない。

「さて、さつさと食べるぞ」

テーブルに人数分並べられた朝食がなんとも、懐かしい。そういえば親と離れて暮らすようになってから、こうした食事は自分も初めてだったということに今気がついた。

朝食の間、俺達の間にはとりとめの無い日常の会話ばかりだった。だから一瞬忘れそうになる。今自分達が置かれている状況を…

「さて、一息ついて早速で悪いが…カルネラ」

朝食の片づけを終えて、四人テーブルに着席したところで、菜月さんが切り出した。

「まだ何も思い出せないか？どう考えても今回のことに深く関わっているのはお前だと思う。過去が分かれば相手の目的もハッキリしてくると思うんだが…」

その言葉に反論は無かった。アーシェラにしても、百々撫達にしてもカルネラに何かしら関わりがあるように見える。

「…その、やっぱりよくは覚えていないんです…ただ…私はずっと昔、教会にいた気がするんです」

控えめな声。その言葉にハツとしたのは俺だけだった。俺が何度も見た夢…あれはきつとカルネラの過去だ。

「……」

けれどそれを言う事が躊躇われた。きつとカルネラにとってそれは幸せではない過去のほずで…何の覚悟もなしに聞けるような話でもないはずだと…そう思う。

「…あの」

でもこのままでは一步も進まない。そう思うが早いか声が出ていた。
「カルネラ…お前にとつていい話じゃないと思う…けど、俺はお前の過去を知つてゐるかもしれない」

じつとカルネラの顔を見てそう告げる。驚いたような顔は一瞬で、すぐに薄く笑みを返してくる。

「大丈夫です…それがどんなものでも、もう大丈夫。今は皆がいま
すから…」

今までと違つ、それは少しだけ自信のある笑みだった。だから俺も心を決める。まっすぐと視線を戻して、口を開く。俺が夢に見たカルネラの過去を話す為に。

そつと目を開くと眩しい光が目の中に入つてきた。それで今はもう夜が明けていることを知る。アーシエラは昨日の事を思い返すが、すぐに首を振つた。あまり思い出したくは無い。その代わりにあたりを見渡す。

「…ここは」

知らぬ場所である。というよりは、昨日の事はあまり覚えていない。フェルデナントに手を引かれるまま付いて行つたことだけは辛うじて覚えてゐる。だから知らぬうちにその姿を探していた。

「…あ」

少しだけ声が漏れた。部屋の端のソファで眠つてゐるその姿を見つける。自分が眠つてゐた間は起きていたのだらうと思ひ、少しだけ悪い気がした。それと同時に、どうしてフェルデナントは自分を庇つたのだらうかと考える。互いに利用しようと思つてゐたはずだ。それだけのほずだったのに…命を救われてしまつた。

「ありがとう」

聞こえぬであろう礼を告げる。アーシエラも聞いていないと分かっているから言っただ。すべてを信用していない。だから不利になるような事を言ったりはしない。

「…」

不意にフェルデナントの肩に目を移す。自分を庇ってできた傷、それはなんとも雑に手当されただけだった。アーシエラはだまって手を翳す。

「…っ」

けれどそれはすぐに戻されてしまう。今の自分に神を賛美する言葉など出ない。神のその存在を疑ったわけではない、そうではないのだ。そうではなく…その心に疑問を感じてしまった自分自身が許せなかった。ずっと昔から…聖乙女と呼ばれるようになってからずっと、揺るがないはずだった。この聖剣にかけて、神の変わりに戦うのだと…

「たった数年…それだけよ」

アーシエラ自身気が付いていた。教会の中に悪があることは…全てを正しくすることなど不可能なのだ。たった数年、アーシエラにとってそれは本当に少しの期間。その間に大きく事は変わってしまった。人が悪を生み出すようになってしまった。許せなかった、許せるはずが無かった…けれどそれは…その怒りの矛先は、人には向かわない。

「…私は、私にはっ…人は殺せないのよ」

アーシエラの知らぬうちに涙が頬を伝っていた。ずっとずっと昔、アーシエラは人ではなくなってしまった。悪を討つ力を得た代わりに、自分を犠牲にした。それと同時に人を傷つけることも出来なくなった。だから使徒がいる。

使徒が聖乙女の代わりに人を殺すのだ。

「…もう、私には」

居場所が無かった。

教会が悪と呼ぶ存在は確実に減ってきている。もう聖乙女が必要とされるような戦争は起こらないのだ。だから使徒の数も徐々に減り、昔のように聖乙女を崇めるものはいなくなっていた。人が敵に回ればアーシエラには何も出来なくなってしまう。昔のようにハッキリと、ただ悪を見据えていられなくなってしまった。絶対悪などあるわけがなかったのだ。

カルネラを見ていれば分かったはずだ。けれど考えなかった。存在が悪だと決め付けていた。そうしなければ自分を保っていられなかった。

けれど今、その全てが間違いだと気が付いてしまった。

すべて話し終えて、小さく息をついた。その後も暫くは誰も口を開かない。フィルネスさんと菜月さんは何かを思案しているようで、考え込んでいる。カルネラは…黙って下を向いていた。

「…カルネラ、京右の見た夢ってというのは…」

沈黙を破ったのは菜月さん。思案していた顔をあげ、カルネラに視線を送る。

「恐らく間違いないと思います。思い出したわけではないですが…それがただの夢じゃないことだけは…」

「そうか」

会話はそれだけ、それでも何かを納得したのか今度は夏樹さんの視線がこちらに向けられる。

「京右、多分お前が見た夢は思っている通り…カルネラの過去だと思う。契約しているからかもしれないし、そうじゃないかもしれない…それは分からないが、夢が現実だということは確かなようだ」

「はい」

「きつと今回の事の根本に関係しているはずだ…だから些細な事でもカルネラには伝えた方がいいだろう」

俺にはよく分からない断片的なものだったとしても、カルネラにな

らわかるかもしれない。そういう事だろう。本音を言うならば、少しだけ躊躇われた。それはきっとカルネラにとっていいものではないだろうから…。

でもそれを選ぶのはカルネラで、俺にはどうしようもない。

「キョウスケさん」

「？」

不意に呼ばれた声に視線を返すと、薄く微笑むカルネラの顔が目映った。

「ありがとうございます」

そんな言葉が返ってくるなんて思っていなかったから、思わず目を丸くしてしまう。そんな俺の様子を見て、カルネラが言葉を続けた。「いい話じゃないですけど…少しだけ自分のことが分かりました。

まだ完全に思い出せてはいないけど…それでも前進です」

最後に照れたように笑うカルネラは、初めて会ったときと同じで、ただの少女そのものだった。だから俺も同じようにして笑う。

「そうだよな、進まないより…いいんだよな」

「はい」

小さな返事。だけどそれは確かに胸の奥に響いた。

切れかけた街灯がチラチラと目に付く。時刻はもう深夜。多少冷え込むが、そんな事を気にして入られない。

「遅い…」

耐え切れず口にしたのは少女、折原百々撫だった。百々撫がここで待ち始めたのはもう何時間前のことだろうか。人一人通る気配のない市街地の外れ、そんな場所に不釣り合いな少女が一人…おかしい光景である。

「修斗も勝手に行動して…だから嫌いなよ、あいつ」

待ち人來たらずのこの状況もそうだが、それに付け加えるようにし

て、もうひとつ百々撫をイラつかせているのは、修斗の存在であった。本来ならばこの場所で百々撫と共に、ある人物を待っているはずなのである。

「決めた…後一分で来なかったら帰ってやる」

「惜しいなあ」

帰ると口にした瞬間、その背後から声がかけられた。驚いたように振り返るとそこには、約束の人物の姿がある。

「…ずいぶん遅い登場ね」

少女の皮肉めいた台詞を気にも留めず、男はひらひらと手を振って笑う。長身だが、大男というほどの高さではなく、どちらかといえばその体も細身だった。黒い前髪は長く表情が読み取りづらい。

「で、アーシエラは？いつまで遊んでるつもりだ？」

「…っ、遊んでなんて…」

先ほどまで笑みを浮かべていたかと思えば、その目は打って変わってきたものに変わっていた。気がついたように百々撫が言葉を詰まらす。

「聞いてないのよ…あんな奴がいるなんて…」

「あんな奴？」

思い出しただけで腹が立つ。アーシエラのそばにいるのは二人の使徒。それだけのはずだった。けれど追い詰めたアーシエラを庇い連れて逃げたのは違う男。しかも百々撫はその姿を知っていた。

「…フェルデナント…とか言っただけ」

突然転校してきたかと思えば、すぐにその姿を消した転校生…百々撫が知るフェルデナントはそれだけの男だった。けれど実際は違う。ビルから飛び降りてもどうじない、それどころかそのまま逃げられるような男だった。

「そいつが？」

「…アーシエラを連れて逃げたわ、どう考えても人間じゃなかった…人間になんか逃げられるもんですか」

ギリッと歯をかみ締めて表情を歪ませる百々撫に、男は小さくため

息をついた。

百々撫と修斗はれっきとした人間。それがアーシエラを追う点で強みでもあり弱みでもある。聖乙女であるアーシエラは人を殺せない。だから使徒さえどうにかしてしまえば、人間である方がやりやすいのだ。

アーシエラがカルネラ一人を始末する為に使徒を二人連れているのもそこに理由があった。アーシエラ自身気がついていたのだろう。自らの敵がいつからか「悪」だけではなくていた事を…

「まあ過ぎた事は仕方がない。それよりもカルネラとフィルネスはどうなってる？」

「…それもたいした変化はないわ、契約者を始末したつもりだったんだけど…運よく生き残っているようだし」

失敗続きか、と内心笑うが声には出さなかった。潰せるところから潰すべきだろうとは思いつつも、百々撫は自分と行動を共ににはせぬだろうと事を男は知っている。

「お前は修斗と一緒にアーシエラを追え…カルネラの方は俺が探ろう」

言うが早いか立ち上がった男は、口元に笑みを浮かべた。楽しみだと…そう感じていた。

「買い物？」

翌朝、俺とカルネラはそう声を合わせて、菜月さんとフィルネスさんに顔を向けた。返されたのは穏やかな笑み。

「だって、二人ともものんびり出来てないでしょ？出来るときに息抜きはしておくものよー」

だからと言って、こんな時期に…とは思うが喉の奥から言葉が出てこない。正直な話のんびりしたい…というのもあるのだが、何をどう言っても言い包められてしまいそうな予感がしていたから、と

というのが実のところ。

「暫くは使徒の奴等も動けないだろうしな、京右の言っていた例の奴らなら、カルネラがいれば平気だろ」

追いつちのように菜月さんに言葉を続けられて、俺とカルネラは顔を見合わせる。

次の瞬間、返事は決まっていた。

半ば無理矢理外出させられた、俺とカルネラは当てすらしく町を歩く。そのままではカルネラが目立つだろうと、出かけにフィルネスさんがカルネラの髪をまとめ、帽子をかぶせてくれた。そのお陰というかなんというか、行きかう人の視線が突き刺さるようなことはない。

「……」

「……」

会話がない。別に何がどうしたということもないのだが、こうして出かけてする会話が思い浮かばないのだ。おそらくそれはカルネラも一緒だろう。

「よし、カルネラ！」

「は、はい！」

急に声を上げた俺にカルネラが体を震わせる。そんな様子に思わず笑みがこぼれる。そうだ…何も気後れする必要などなかった…カルネラはいつも通りなんだから…

「行きたいところ、ないか？」

今日は、今日だけは楽しんでもいいのかもしれない。折角の安息なんだから…

悩んだままのカルネラの手を引く。楽しむと決めたのだから、一分一秒でも無駄になどしたくなかった。

翌朝になってからフェルデナントとアーシエラはやつとともに顔を合わせる事になった。けれどもその間に会話はない。アーシエラも幾分かマシになったとはいえ、その目には未だ光が宿っていない。

知らずフェルデナントはため息を零していた。いつまでこんな事を続けているのだろうかと自問自答を繰り返す。そうだ、自分には時間がないのだ…いつまでも腑抜けたアーシエラに構っている余裕などありはしない。

黙って視線を向けると、俯いたまま地面を睨むその顔が目に入った。いつそのこと、殴りかかりでもすれば元に戻るのではないかと思ってしまう。だが、そんな事は無意味でしかない。

「……」

いくら使徒の回復が通常の人間に比べて早いとはいえ、まだ二、三日は動けないままだろう。その間にカルネラやフィルネス達が動き出しては厄介だ。それだけではない…アーシエラを屋上で襲った人物は、確実にカルネラ達の仲間ではない。フェルデナントに思い当たる節は一つしかなかった。

「おい、嬢ちゃん…TRINITYって組織を知ってるか？」

返事は期待などしていなかった、それでもアーシエラが顔を微かに上げる。

「教会って組織は昔は一つだった。だけど今はそうじゃねえ…内部で二つに割れてる。片方は知っての通り聖乙女と呼ばれる総帥を崇める、今までの教会側だ。それと敵対するもう一つの内部組織、それがTRINITYだ」

否定も肯定も返ってこぬまま、フェルデナントは言葉を続けた。

「奴等は教会を根本から変えようとしてる。悪魔達を排除する事を目的になんてしていない…もう人と悪が戦うなんて事態は殆どなくなつたからな…、今の世で争ってるのは人と人だ」

「……」

「悪魔の力つてのは人の何十倍も強い、人と悪魔の戦争ならば確実

に悪魔が勝てる…だけどそのままの悪魔じゃあ、人の言葉に耳を傾けることもしない。そこで、どうするか分かるか？」

返事はない。ただ少しだけ、アーシエラのその目に光がもどっている気がした。

「悪魔の力だけを、悪魔から取り出せばいい」

「…悪魔の力」

「生物には核があるだろ？当然悪魔にもそれがある…それだけを別のものに埋め込むんだよ」

淡々と言葉を続ける。アーシエラも黙ってその言葉を待った。おそらくその実態をアーシエラは知らない。TRINITYという存在は知っていても、それが何を行ってきたかなど知らないだろう。

「核を埋め込むとなれば対象は動物だ…だけど獣じゃ知能レベルが低すぎる」

「…まさか」

「そのまさかだ…悪魔の核を人に埋め込んだ」

息を呑む。まさかそんな事を行っているなどと予想すらしなかった。否、そんな事は不可能だと思っていた。

「勿論、簡単な話じゃない…拒絶反応を起こさない人間のほうが珍しい」

「……けれど、成功したのね」

小さな声に頷くと、アーシエラが忌々しげに眉を潜める。自分は何をしていたのかと…そう思っているのだろう。

「適合者が現れる確立は千分の一程度だがな、とは言ってもそれも十年ぐらい昔の話だ。今…どうなっているかは検討もつかない…」

「どうして…、あなたはそんな事を知っているの？」

当たり前の疑問。恐らく問いかけられるだろうと言うことも分かっていた。分かっている話したのだ。

「…簡単な話だ、俺はTRINITYに悪魔の核を埋め込まれた。だから…全部知ってる」

息が止まった。アーシエラは聖乙女として今まで生きてきて、これ

まで悪魔の気配を逃したことなくあった。だからこそ…悪魔の力を持った者を見逃すはずなどなかったのだ。

「そんな、私は何も…」

「当たり前だ」

言葉を察したような間髪入れぬ返事。アーシエラが視線を向けた先には、背を向けたフェルデナントがいた。

「…俺が核を埋め込まれた際に使われた悪魔の核は半分だけ…もう半分は別の人間に埋め込まれた。そいつは悪魔の力を十分に手に入れたが、俺はその力を十分に手に入れられなかった」

「どういう…意味？」

意図がはつきり分からず、問いかけるアーシエラに、フェルデナントは小さく息をつく。

「つまり、俺は失敗で…そいつは成功したって事だ。そいつは悪魔に近いから嬢ちゃんも感じられるだろうが、俺は人間に近いせいで感じられないんだろう」

「…そう、じゃあ貴方も…悪魔なのね」

短い言葉。アーシエラが聖乙女である限り、その意思を今まで通り突き通す限り、フェルデナントも悪として切り伏せねばならない存在に違いなかった。

「ああ…人を傷つけられない嬢ちゃんに、俺が殺せるかは知らないけどな」

「…！」

「聖乙女は人を殺せないんだろ？でも使徒はそんな制約を受けない。だからTRINITYは最初に障害になるであろう使徒対策に俺達を使おうとした。まあ…それが終われば金儲けに精を出すつもりだったんだろうが…」

呆れた様な言葉に、アーシエラは視線を落とす。

「…全て知っていたのね…最初から、私が聖乙女であることも…」
返事は返さないが、無言は肯定の証でもあった。

「いいや、気がついたのはしばらく経ってからだ…本当に最初は、

こんな子供が聖乙女だなんて思わなかったさ」

「……」

それでも、アーシエラが教会の人間であることは分かっていたのだろう。そう考えて言葉がつけなくなつた。アーシエラのほうが完全に利用されていただけと言うことだ。

「どうして、そんな話を話す気になつたの？ 例え私が貴方を殺せなかったとしても、使徒に命じれば貴方は追われることになるのよ？」

「さてな、気まぐれだ」

簡単な返事を返されて、アーシエラは言葉を失う。そんな適当な返事を信じる気になどなれなかった。

「理解できないわ…自ら敵を増やすなんて……」

そう言葉にするものの、アーシエラがフェルデナントに剣を向ける気配はない。

「そう、だな…初めて会つた時だ」

「…？」

「あの日、助けてもらった借りが残ってるだろ…あの分だと思って黙つて聞けよ」

一度だけ視線がかみ合う。その目があまりに真剣だったせいか、アーシエラは口を噤む。

「嬢ちゃんを狙つてきたのはTRINITYの奴らだ。相手は人間と、意図せず悪魔つていう兵器にされた元人間…。何を悪とするのかは嬢ちゃんの自由だ…けどな、他人の言葉で簡単に折れちまうような信念なら捨てちまえ」

簡単に折れてしまった心の剣。仮初の剣ならば捨ててしまえばいい。「カルネラも、TRINITYに核を埋め込まれた人間だ。忘れるなよ…元々は人間で、それを望んだわけじゃないって事を…。それでも、その全てを悪だつて言うなら今まで通り戦い続ける」

「貴方も…悪になるのよ」

それでも…次こそは貫いていけるのなら、また剣を握ればいい。

「…今更だな、元より俺と嬢ちゃんは敵同士だろ」

一が零に戻っただけの話だった。

「次に会うのは…どっかが死ぬ時だろうな」

言葉と共にフェルデナントが歩き出す。一步、二歩…すぐに扉までたどりついた。その間…アーシエラは何も言わず、その背中をただ眺めていた。

「……」

何かを言いかけて、結局無言のままその背は部屋を後にしてしまう。

「……理解、できないわ」

呟いた言葉に返事はない。どうしてそんな話を…そう思うが、すぐに首を振った。きっと今はそんな事を考えているときではないのだ。そう…悪を、見定めなければならぬ。

帰り道、俺とカルネラは小さな公園で足を止めた。何をする訳でもなかったが、ベンチに腰掛ける。

何も言わずに流れるような景色に目を映していた。子供の姿はもうまばらになっている。もうすぐ日が暮れるのだ。

「なんとなく、なんですが…思い出せたんです」

つぶやくような声。俺はそれに視線だけを返す。

「私は、小さい頃施設で育ちました…本当のお母さんはいなかったけど、キョウスケさんの話してくれた人のこと…覚えてます。優しく、元気で…一緒にいると楽しかった。でもたまに…一人のときに悲しそうな顔をしてました」

きっと、ずっと昔その人は教会と関わりがあった。何があったのかは分からない。だけどそれは、その人にとって良い事ばかりではなかったのだろう。

「今なら…なんとなく分かります。先生は使徒って呼ばれる人達と同じで、何かしてしまったから殺されたんですよね…」

「多分…な」

うまく返事が返せない。どう、言葉にすればいいのか分からなかつ

た。

「悲しく…なかったでしょうか？辛くは、なかったでしょうか？」
カルネラの手が震える。その目には涙が浮かんでいた。

「先生…笑ってました。最後の最後まで…私に笑ってたんです」

きつと、幼かったカルネラにその笑みの理由は分からなかったのだらう。今でさえ、全てを理解なんて出来るわけが無かった。当たり前だ…その人は、全て自分の中で過去を消化しようとしていたのだから。

「私は、あの日先生を助けられませんでした。どんな理由があったとしても、先生がそれを受け入れていたんだとしても、私は…やっぱり嫌です」

理不尽だ。そんな理不尽な理由で誰かが命を落とすなんて嫌だったんだ。だからカルネラは…

「俺も、嫌だ…」

やつと動かすことが出来た手でカルネラの頭を撫でる。泣きそうなカルネラをみて、そんな事しか出来ない自分が居た堪れないが、何もしてやらないよりマシな気がした。

「…キョウスケさん、全部…話してくれてありがとうございました」
目にたまった涙をぬぐってカルネラが視線を返してきた。真っ直ぐとした目。

「私、別に教会と戦いたいわけじゃありません。でも…私は、私には助けない人がいます」

「助けない…人？」

鸚鵡返しに向けた言葉に、カルネラは迷わず口を開く。きつとどこかで予想していた、続く言葉を…

「私は、お兄ちゃんを助けない」

Take 7 Reason

夜、その全てが闇に包まれることなどなくなった世界。

街頭の光は未だ光を灯し、街行く人の影も少なからず見受けられる。そんな様子をビルの屋上から見下げる一人の男。

「さて、どこに隠れているやら……」

男の口には笑みが浮かぶ。百々撫と別れてすぐ行動を開始した彼は、見晴らしのいいビルの屋上へと足を運んだ。暫くジッと街を見下ろす。常人には決して見る事ができないであろう遥か彼方すら男には見えていた。

「ああ…見つけた」

楽しげに喉が鳴った。事実男は楽しみだと感じている。

一瞬だけ強い風が吹く。次の瞬間、男の姿はビルの上から消えていた。

ビクッとカルネラの体が震える。

「っ」

見ればその顔は青く染まっていた。何がどうしてしまったのか分からない俺は、カルネラの顔を覗き込む。

「カルネラ？」

「駄目…来る…」

呟く様な小さな声だったが、その言葉ははっきりと聞き取れた。『来る』それは教会の人間が…という事なのだろうか、それとも…

「キョウスケさんっ！逃げてっ！！」

急に立ち上がってカルネラが叫ぶ。驚いて立ち上がるが、当然逃げるなんて事はできない。当たり前だ。

そう思った瞬間、意識とは別に背筋が凍りつく。息ができない。声

が出せない。指一本すら動かせない。『何が』と問う前に分かった。これは教会なんかじゃない。あんな優しいものなんかじゃない。それは…

絶対的な殺意

「こんばんは」

柔らかい声。けれどそれには全く感情が感じられなかった。

「貴方は…」

カルネラの声に、恐る恐る視線の先を追うことができた。そこに立ち尽くしていたのは全身を黒で包んだ長身、細身の一人の男。ただそれだけなのに、相変わらず声が出せない。

「結構手間取らせてくれたみたいだなあ…こっちはお陰で色々大変なんだ」

俺達の様子などまるで気にしていないように、肩を竦める。

「あーでも、あれには感謝しているよ…聖乙女の使徒を瀕死にくれた事。まあこっちとしては殺してくれての方が有難かったんだけど」

言葉に返事が返せない。その体から発せられる殺意から、俺達の敵である事は明白だった。だが男は聖乙女の使徒を瀕死にしてくれて、ありがたかったと言っている。

「TRINITY…」

「そうか、カルネラも思い出したんだな」

TRINITY…聞いたことのない名前だった。カルネラの顔がみるみる青くなつていく。それに相反するように男の口が釣りあがる。

「何を…しに来たんですか」

「何？ああ…連れ戻しにきたとでも思ってるのか」

馬鹿にしたように笑う。ひとしきり笑った後、スッと真顔に戻って視線を返す。

「残念ながら、もうお前もあいつも不必要だ……処分しに来た」
冷たいはつきりとした言葉。その言葉の意味がはつきりと分かっているのに体が動かない。どうすればいいのか思い浮かばない。ただ

頭の隅で警報がなり続ける。

逃げる

逃げる、二ゲロ

一瞬、静寂の中で響いた物音に、カルネラの手を引いて駆け出す。

「！」

そんな行いは無意味だと分かっている。分かっているがそれ以外にどうすればいいのかが分からない。だから全速力で走り抜ける。それしかできないかのように……だが、それすらもできないのだと知る。

「逃げられるわけないだろ？」

目の前に佇む男。駄目だ……逃げ切れるわけがない……死んでしまう……

「キョウスケさんっ！」

目の前が真っ暗になった瞬間、カルネラの声に引き戻される。必死な顔が目映る。

そうだ、まだ諦めるには早い。まだ何もしてはいない。

カルネラに頷きを返したとほぼ同時にその手を強く引かれる。少しからだのバランスを崩しながらも、どうにか倒れこまずに足を踏ん張る。視線を元に戻せば、俺の前に立つカルネラの背中が目映った。

「絶対……キョウスケさんには手出しさせない」

まっすぐと男を見据えながらカルネラは構える。だが、男は微動だにしない。少しだけ考えるそぶりを見せ、納得したように笑みを浮かべた。

「キョウスケ……そう京右だ……、確か契約者の名前だったな」

「っ！」

カルネラと俺はほぼ同時に息を呑んだ。男の視線が俺に定まる。

「キョウスケさんっ、逃げてっ！」

それは叫び声に近かった。声とほぼ同時に駆け出したはずの俺の体は……その場に倒れこむ。

「っぐ」

その衝撃に眉を潜めた。だが気がついていなかった。それよりもっと…恐ろしいものが迫っているのだと…

「キヨウスケさんっ！…！」

その声が、意識が途切れる前に聞いた…最後の声だった。

そつと目を閉じた。もうすぐ夜が明ける。アーシェラは祈るように手を組み、跪く。

フェルデナントが出て行ってから、アーシェラはずっとこの場所を考えていた。自分にとって悪とは何なのか、自分にとって戦う理由は何なのか…

「…全ては神のお心のままに…」

心にずつと植えつけてきたその信念。それが正しいのだとずつと言い聞かせてきた。否、正しいと信じていた。けれど、『…他人の言葉で簡単に折れるような信念なら捨てる』そう言ったフェルデナントの言葉が頭から離れない。本当に折れてしまったのだろうか？ たった一言で、簡単に折れてしまったのだろうか？ ずつとずつと…戦うと決めたあの日から…誓ったはずなのに。

「私はどうすればいいの…ルイス」

泣き言など、ずつと言わなかった。

神に選ばれたのだと…その日から、自分を捨て、家族を捨て、ただ神の為だけに生きてきた。

「全て無駄だったの？」

思えばあの日、あの剣を手にしていなかったなら、どうなっていただろう。

ただ普通の少女として、生きて死んでいたならば…愛しい人を失う

事もなかったのだろうか？

「…私はっ、何の為に戦えばいいのっ！」

遠い昔、神のために全てを捨てた。だからこそそれは絶対であり、同時に自らの存在意義でもあった。ここで神を切り捨てたとすれば、過去にアーシエラが失った全てのものは無意味にすら感じられた。自分の過去を無に返すことなどできない。それには失ったものが大きすぎる。大切なものを全て失って手にした剣を、捨てるなんてできない。

「こんな事…私は望んでいなかった」

その剣を手にとったのは大切なものたちを守るため。それは決して多くではなかった。

「…ルイス」

ただ一人、たった一人を守りたいが為だった。

その為に全てを捨て、その剣を手にとったのに……

「どうして、貴方はいないの……」

誰も傍にはいなくなっていた。

遠い遠い昔の話。

アーシエラ・シルバニアは小さな田舎町に生まれ育った普通の少女

であった。人より少し信仰心の強い面はあったが、それも他者とそう大差を付けるような問題ではなかった。そんな普通であったはずの少女の運命を変えたのは、本当に些細な出来事からであった。

12月24日、アーシエラの12の誕生日に運命を変えるその男は尋ねてくる。

その日、アーシエラと両親はささやかながら誕生日パーティーを行っていた。パーティーと言ってもそんなちゃんとしたものではない。いつもと変らぬ夕食にケーキ代わりの菓子パンがあるだけ。それでも幼いアーシエラにとっては雰囲気と特別な日だという気分のスパイスだけで、十分なパーティーになる。ただ幸せな気分を味わいながら、アーシエラはその日を終わるのだと思っていた。けれど、星が空を覆う時間帯になった時、一人の来訪者が訪れる。

軽く叩かれた扉を開けたその先に立っていたのは、一人の神父であった。信仰心が強かったアーシエラにとっては、その姿だけでも自然と安心してしまふ。神父は一度深く礼をした後、その視線をアーシエラへ向けた。

「はじめまして、私はクレイルと申します」

少女に向ける自己紹介にしては少しかしこまり過ぎた印象を与えるそれに、アーシエラは同じ様に頭を下げる。

「こちらこそはじめまして、アーシエラ・シルバニアと申します」

アーシエラのその言葉は少しばかりませた感じを漂わせる。それでもクレイルは変った様子もなく、更に優しく微笑んだ。

「思った通り聡明な子ですね、私の目に狂いは無かったようで安心しました、アーシエラ」

そう言つてクレイルは一度アーシエラから、その両親へと視線を移した。

「私、教会から参らせて頂きました。クレイル・オーズウェンと申します」

「教会？」

鸚鵡返しに返事を返したのは両親。アーシエラは神父なのだから教会から来るのは当たり前だなどと思っていた。

けれどそれはアーシエラが事を知らない子供だったからからという事…

教会は、神の使者として信仰を深め、広めるだけでなく……悪魔や吸血鬼と行った者達と戦う組織でもあった。

「アーシエラ…私は貴方を迎えに来たんです」

「私を…？」

クレイルの言葉に素直に首を傾げる。意図が掴めないでいた。

「そうです…貴方には素養があるから…」

クレイルの言葉は事実であった。アーシエラには教会に入るだけの素養が備わっている。ただこの時まで誰一人それに気が付かなかっただけだった。

「私と一緒に…来て下さい、アーシエラ・シルバニア」

優しく差出された手…それがアーシエラの運命を変えた。

まるでそうなる事が運命だったかのように、アーシエラはその手を取ってしまった。

そしてこの日から、全ては始まったのだ。

後日、教会総本部に連れてこられたアーシエラは圧倒されていた。

この時、まだアーシエラは12になったばかりの普通の子供なのだから、それを目にすれば当然の事だった。高く聳え立つまるで城のように立派な教会。一瞬にしてその美しさにアーシエラは心を奪われる。

「すごい…」

やっとの事で口に出来たのはそれだけだった。そんなアーシエラの様子にクレイルは薄く笑みを零す。

「さあ、行きましょう…貴方を待っている仲間がいます」

そつと手を引かれるまま教会の門を潜る。不思議と緊張はしなかった。どちらかといえば好奇心というのだろうか、その方が大きい。

「仲間ってどういうことですか？」

よくよく考えればアーシエラは教会の事を殆ど知らずに来たに等しい。だからこの時はまだ知らなかったのだ。自分が悪と呼ばれる者達と戦うなど……

「そうですね、その話は皆がそろってから…ということでしょういいですか？」

そう優しく微笑みを返されて、それ以上は聞く事が出来なくなってしまった。

暫く歩いて着いたのは少し大きな目の広間だった。扉を開けた正面には大きな天使の像が立ち、ステンドグラスから射し込む光は柔らかく美しい。思わず息を呑んだ。

「シファン！ルイス！いないのですか？」

アーシエラの先を歩くクレイルが部屋を見渡しながら声を上げる。

何度か声を上げて、やっとその姿が現われた。

「あ、クレイルさん帰ってきたんですね」

ひょっこり顔を出したのは、アーシエラより少しだけ年上だろうか、色素の薄い金髪が少しはねついている。くりつとした目の、まだ若い顔立ちをした少年だった。

「シファン、ルイスはどうしたんですか？」

「えーっと…それが待ちくたびれてどっか行っちゃったみたいなんですよねえ…」

シファンと呼ばれた少年が、クレイルの問いかけにばつが悪そうに答える。決してシファンが悪い訳ではないのだが、何となく言い辛いのだろう。

「全く…まあいいです、先にシファンには紹介しておきます」

クレイルがした小さな手招きに答えるように、アーシエラはその側

まで歩み寄った。並んでみるとアーシエラの小柄さが目をひく。シファンも小柄な方なのだろうが、アーシエラはそれより一回り小さかった。

「彼女がアーシエラ・シルバニア…私達の新しい仲間です」

「よろしくお願いします」

クレイルの言葉に続いて、アーシエラが丁寧に頭を下げた。それに
つられるようにしてシファンも頭を下げる。

「こ、こちらこそお願いします、シファン・マネリーです」

簡単な自己紹介を終えるなり、クレイルがシファンに目を向けた。

「ルイスを探さなければいけませんね…手伝って下さいシファン」

「あーはい」

ルイスがフラフラと出ていってしまったのを見過ごしていたシファンに断れる訳もなく、有無を言わさぬ形でその言葉に頷いた。

「アーシエラはまだここを良く知らないのですし、待っていて下さい。出来る限り早く見つけて戻ってきますので…」

アーシエラは素直に頷く。別に待つ事自体は苦痛でもなんでもない。こんな美しい場所で待っていていられるのなら全く構わないと思っていた。

「それでは、行ってきますので」

言うが早いか、クレイルとシファンは揃って部屋を出ていってしまった。

一人ぼつんと残されたアーシエラは静かに当たりを見渡す。やはりその目に一番焼き付いたのは美しい天使の像だった。その像の前でアーシエラは静かに膝をついて、祈りを捧げるように手を組んだ。

「神の御加護があらん事を…」

目を閉じて、暫く神に祈る。これより先、神が全てを見守っていてくれるように、誰も傷つかぬように…そうアーシエラは祈った。

そして再び目を開き、座って待っていてようと振り返った瞬間、一人の男と目が合った。

アーシエラより五つ程年上だろうか、背も高く顔立ちも幼いもので

はなかった。銀の色をした髪をばさばさと無造作に掻きながら、静かに歩み寄ってくる。

「……」

無論アーシエラにはそれが一体誰なのかは分からない。けれど男は迷う事なくアーシエラの前で立ち止まった。

「…お嬢ちゃんが、アーシエラ・シルバニア？」

半信半疑で問い掛けられた言葉に、頷くとその男は驚いたように目を見開く。それから暫くアーシエラの姿をまじまじと見つめた後、たった一言だけ呟いた…

「ちっさっ…」

その瞬間アーシエラの頭にまるで石でもぶつかったかのような衝撃が走った。当然ながらショックを受けたただけなのだが…あまりにショックが大きすぎてついアーシエラは手を上げる。

「…！」

パシンツという大きな音が響き、アーシエラの手は男の頬を叩いていた。

それが最悪とも呼べる出会い。

彼こそがもう一人の仲間であるルイスだと知ったのは…その少し後の事だった。

男の名はルイス・レント。それがすぐ今の事だと分かる程、彼の頬が腫れていた。アーシエラとルイスが互いに自己紹介を終えたのは、本当に先程…それからというもの、ずっと気まずい雰囲気の流れている。

「まあ…あえて何があつたのかは聞かない事にします」

「いや、そこは普通聞くだろ…！」

冷静にそう言つてのけたクレイルに激しく突っ込みを入れたのはルイスだった。

「どうせ聞いてもろくな事じゃないのは分かりきっていますし…時間の無駄でしょう」

傍目から見ていても分かる程にクレイルはルイスに対して冷たい。すっぱりルイスの抗議の声を切りさつて、クレイルはアーシエラに向き直る。

「アーシエラ…貴方に話しておかなければならない事がいくつかあります」

ふと優しいながらも真面目な顔つきになったクレイルにアーシエラは無言のまま頷いた。

「まず、この教会という組織について…アーシエラは神に祈りを捧げ、人々の懺悔を聞き、迷い人を導くのが教会の、神父達の役割だと思つていますね？」

「…違うのですか？」

純粹な疑問だった。アーシエラはそれこそが教会の役割だと思つていたし、事実殆どの人がそう思つているだろう。

「勿論それも…教会の役割です。でも実はもう一つ…重大な役割を持っているんだよ」

まるで秘密の話でもするかのように、クレイルは口元で指を立ててみせた。

「それが悪といわれる者達から人々を護るという役割、神の使者として神の代りに悪を裁く存在…それがもうひとつの教会の姿なんです」

「悪を…裁く……」

鸚鵡返しのようについ呟いてしまった。そんな言葉を聞いても急には理解できない。アーシエラはそれが「悪」とはなんなのか具体的なものを知らないせいなのだと思うた。

「アーシエラ、我らが敬愛する神や天使がいるように…悪魔やその類の者達も存在しているのです」

瞬間的に、それが悪なのだとアーシエラは理解した。信仰心の強さからか、同時に納得もしたのだ。

「我々はエクソシスト、魔を狩る神の使者なのです。そして…貴方にもその素質がある」

素質と言われても、いまいちピンとはこなかった。何の変哲もない村で育ち、生きてきた自分に何があるというのか…アーシエラはそう思うが故に返事が返せなかった。

「神を思う心…それが本物であるならば、ほかに必要なものなどないですよ、だから安心して下さい…アーシエラ」

神を思う心、アーシエラにとってそれは揺るぎ無いものだった。だからその言葉に今度は頷く。神を思う事なら、敬愛する事ならば自分にも出来る。そう思ったから…

「私に…出来る事があるなら…」

恐る恐るながらアーシエラは言葉にする。その時、正直に言えばまだ見ぬ悪という存在を恐れていた。しかしそれも当然の事…この時アーシエラは、まだ12の少女だったのだから……

アーシエラが教会に来てから、一年の時が流れた。

その間にアーシエラが知った事、それは悪魔やその類の者達が実際に存在するという事。そして人知れずその者達の犠牲になっている人々がいる事。

はじめて悪魔と対峙した時の事をアーシエラは一生忘れないだろうと思った。

床や壁に飛び散った血、鉄の臭い。千切れた肉の断片、そこからこぼれ出した臓物。そして皮膚の剥ぎ取られた首から下のない頭を持

った悪魔が一人、楽しげに笑いながら佇んでいた。それがアーシエラがはじめて悪魔と対峙した時に見た光景。目の奥が痺れた。声が出なかった。足が動かなかった。初めて恐怖をその身に感じた瞬間だった。その時、動けなくなったアーシエラを助けたのはルイス。その瞬間からそれまでアーシエラがルイスに持っていた苦手意識は消え去り、違う意識が生まれ始めた。

「またそんな所にいたのね…」

空を見上げる様にして声を上げたのはアーシエラ。正確に言っなければ空を見上げている訳ではなく、屋根の上にいるルイスを見てのとだった。

「なんだ？何か用か？」

「別に用なんてないけど…」

ただ目に付いたから声をかけた。そんな風にアーシエラはそっぽを向く。そんな様子を見て、ルイスが屋根の上から飛び降り、アーシエラの前に立つ。

「何よ？」

目の前にたたれてしまうとアーシエラは完全にルイスを見上げなければならなかった。それほどに二人の間には身長差がある。

「いや、相変わらずちっせーなーと思ったただけ」

アーシエラの頭に手を置いて、馬鹿にしたような笑みを浮べたルイスに、むっとしてその手を払いのけた。

「っ失礼ね！伸びてるわよ！………三センチくらいなら」

最後の最後だけ声が小さくなってしまふ。この時のアーシエラの身長は一四〇センチ程しかなかった。まだ年が年なのだから仕方がないとは思いつつも、ルイスの一言以来コンプレックスになってしまっている。

「もう少しくう…成長してもいいと思うぞ」

それは色々な意味を込めての言葉だったのだろうが、アーシエラにそれが伝わる訳もなく、ルイスのそれは嫌味にしか聞えない。

「そういうルイスは人間的に成長したほうがいいと思うけど?」

ふんつと嫌味つたらしく口にしたアーシエラは、どこからどうみても反抗期の少女のようだった。だからついルイスは笑ってしまう。

「な、何を笑ってるの!？」

「いや、それでも我慢したほうだ、許せ」

一度笑い出したせいでとまらないのか、ルイスは言いながらも笑い続けている。それに一層顔を膨らませたアーシエラ。

「み、見てなさいよ!後何年かで驚くような成長してあげるんだから!」

まるで宣戦布告のそれを笑って受け止める。数年経てば、アーシエラは驚くような美人になるんだろうなとルイスは密かに思う。

「楽しみにしてるぜ、アーシエラ」

正直な感想として返せば、アーシエラは驚いたような顔をした後、やはりそつばを向いてしまった。

(…変な気持ちだわ)

ドキドキと動悸を繰り返す胸を抑えながら、アーシエラは俯く。いつの日からか、ルイスに惹かれていた。認めたくないけれど自身気がついていた。

ルイスを失いたくないと…目に焼き付いて離れないあの光景のようにだけは絶対にさせたくないと…

そしていつからか、それがアーシエラの戦う理由になった……

Take 8 Determination

平穏な日々はそう長く続かなかった。

日を増す毎に悪魔達は増え、その犠牲者も多くなっていた。当然の様にアーシェラ達もそれを倒す為に駆り出され、危険と隣り合わせの毎日をおくる。分かっていたとは言えアーシェラは戸惑う。そしてそんな迷いをかき消すように必死に戦い続けた。

けれどその日は来た。

完全に敵対した教会と悪魔達による戦争。それは悪魔達の一方的な虐殺によって始まり、微かな希望すらも打ち碎いた。

いつかはくるのだろうと覚悟していた筈だった。だというのにそれを現実として受け止めると苦しみが胸を襲った。激しさを増す闘いの中、シファンが命を落した。この時アーシェラは13歳、まだその事実を正面から受け止めるには幼すぎた。

薄暗い部屋の中、眠ったように死んでいるシファンをアーシェラとルイスは見つめていた。

「どう、して…」

瞳から溢れ出した涙は止まる事無く頬を伝う。

こんな苦しい思いをしたのは初めてだった。初めて身近な人間の死を体感した。

「…っ、う…」

泣く事しか出来ない。悲しみが世界を覆ってしまったようだった。けれど何一つ終ってなどいなくて、むしろこれから始まるのだと言う事を心の何処かで感じていた。

「泣くな…」

優しくかけられた言葉と同時に頭を撫でられ、アーシエラは顔を上げる。

どんな顔をしているのか分からないといったルイスと目が合い、再び涙が溢れ出す。頭に触れる優しい手が心を揺さ振った。

泣いている場合などではなく、一刻も早く打開策を見つけるべきだと心では叫びながらも、頭が正常に働いてくれない。ただこの手を失うのだけは嫌だと強く思った。

「お前がそんな泣く必要ない」

ルイスの言葉に返事は返せなかった。分かっているつもりでも自分の無力さを感じずにはいられない。もっと力があれば、もっと自分に何か出来れば…全てを守る事が出来るだろうに…そう思ってしまった。

「ごめんなさい…もう、平気だから」

言うが早いアーシエラはその場を後にする。

そのままその場にいてしまえばルイスの優しさに甘えてしまいそうだった。それでは何も変わらない、そうアーシエラは思う。

（私に…出来る事……）

考えながらアーシエラが辿り着いたのは、はじめてここに来た時に連れてこられた大きな広間だった。大きな天使の像と美しいステンドグラス…アーシエラにとって忘れられない出会いの場所。

「…主よ」

天使の像に歩み寄り、膝をつく。

「どうか…お導き下さい、お救い下さい」

縋るように祈りを捧げる。きつく握り締めた手は微かに震えていた。恐ろしかった、死ぬ事がではなく、失う事が…

「私の…私の全てを捧げて構いません……お救い下さい」

このままでは遅かれ早かれ皆死んでしまう。それが分かっているからこそ出た言葉だった。

「死なせたくない人がいるんです…お願い、します……私は全てを捧げます！だからっ！！」

祈りはいつしか叫びに変わっていた。喉の奥から絞り出すような悲痛な声。その目からは涙が溢れ出していた。

「お願い…私に、護る為の力を……」

その場に崩れ落ちるように両手をつく。

どれだけ祈りを捧げても、どれだけ願っても、叶えては貰えないのだと諦めかけていた。もしも祈りが届くなら、シファンが死ぬ事もなかっただろう。

「私が護るから…神の代りに、私が護るから……」

アーシエラ達が敬愛する神は見守っていてくれるだけであり、何かを実行する事など無いのだと…気がついていった。だからこそ力が欲しかった。神の代りに皆を護れるだけの力が…

「力が欲しいですか…？」

不意に背後から声がした。突然の事に心臓を高鳴らせながらその声へと振り向く。

「あなた…は？」

そこには目を疑うような美しい女性が、優しくアーシエラを見下ろして立っていた。しなやかに流れる金の髪は腰まであり、その肌は雪のように白く、瞳は深い海のように綺麗な青をしている。

まるで女神のようだとアーシエラは息を呑んだ。

「はじめましてアーシエラ・シルバニア、私の名はマリア・エルノール。この教会の設立者であり、聖乙女と呼ばれるものです」

聖乙女、その言葉はアーシエラも何度か聞いた事がある。神を最も敬愛し、悪を最も嫌悪する教会の総帥。その者に与えられる称号であった。

「聖…乙女様…」

「貴方の声が聞えました。救いを求める声が…」

その言葉にアーシエラは涙を流す。神には届かずとも、聖乙女にはその祈りが届いたのだと微かに安心した。希望という名の光を見た気すらする。

「アーシエラ・シルバニア、力が欲しいですか？皆を護れるだけの

力が…」

優しい問いかけにアーシエラは強く頷いた。

「貴方にはそれを得るだけの資格があります」

「ではっ！」

「ですが…それは貴方から全てを奪ってしまう。貴方は神に全てを捧げなくてはならなくなるのです」

顔を上げたアーシエラの目に映ったのは、酷く真剣な目をしたマリアの顔だった。その目はどこか哀しげでアーシエラは思わず言葉が出てこなくなる。

「力を得ると同時に貴方は孤独になるでしょう。ただ一人、永遠の時を生きねばなりません。歳をとる事も無く、剣を置く事も出来ず、人を愛する事さえも出来なくなってしまうです」

「人を…愛する事も…？」

思わず聞き返していた。アーシエラは分かっていたからだ、ルイスに対するこの想いがなんと呼ばれるものなのかを…

「貴方は神だけを愛し、神の為に生きなければなりません」
それは永遠の鎖。

「それから解放される時が来るとすれば…それは死か、神への裏切りか、新たな乙女が現われた時だけ…」

そこまで言われてようやく気がついた。マリアが自分に聖乙女としての力を受け渡そうとしていることに…

「もし…神を裏切ってしまったらどうなるのですか？」

人を愛する事が出来なくなるといふ事は、アーシエラが誰かを心から愛し、神よりもその人間を選べば裏切ったという事になってしまうのだろう。

だから、それだけは聞いておかなければならなかった。

「もし神を裏切ってしまったら、新たな乙女にその力を渡してしまつたならば…全ての力を失い、全ての記憶を失います。全てを…白紙に戻されるのです」

「全てを…失う」

それは、両親との思い出やルイス達との出会い、その想いさえも…
無かった事にされるといふ事だ。

「だから…選ぶのは貴方です。後悔しない様に…選んで下さい」
その言葉から暫く静かな沈黙が訪れた。

力を得れば皆を助けられるかもしれない。けれど自分の想いをなかつたことにしなければならぬ。ずっと永遠に縛られ続ける事になる。

「なぜ…私を？聖乙女様は戦つては下さらないのですか？」

押し付けがましくそんな言葉が口から出ていた。そんな自分がアーシエラは自分で信じられない。いた堪れずマリアから目を逸らす、マリアは優しく微笑んで口を開いた。

「私にはもう…神を敬愛する事が出来ないのです」

「え…？」

思わず顔をあげたアーシエラとマリアの視線が合う。

「私は…クレイルを愛しています。クレイルも私を愛していると…
そう言ってくれました。だから私は…神を裏切ってしまう」

「でも、そんな事をしたら！全て…忘れてしまうんじゃない」

アーシエラには分からなかった。そんな事がわかっていているというのに、その道を選ぶ気持ちが…

「全て忘れてしまうでしょう…それでも私は彼を愛しているのです。
私が忘れても、彼が覚えていてくれる…それで十分だとおもえるのです」

穏やかな優しい顔だった。だからもうマリアは心を決めているのだと、アーシエラは悟る。

「私は…」

ルイスを本当に愛しているか分からない。それでも死なせたくない
気持ちは本物だった。彼が生きていてくれるのであれば、それでいい
と思った。

だから…

「皆を護る力が欲しい」

そうはつきりと答えていた。

手にしたのは光の剣。纏うは純白の絹。輝く金の髪に、青い瞳。戦場に不釣り合いな少女は、真っ直ぐと前を見据えて、立ち尽くす。誰もが予想しなかったその姿に、人々は息を呑む。少女が振るう剣の一振りで悪魔が倒れていく。

「アーシエラ…」

その少女の名を呼んだのはルイスだった。自分の目を疑う、どうして…アーシエラが、何があつたのかと…頭が混乱する。

「私を守るわ…全て…」

短い言葉だけを残し、アーシエラは悪魔の軍隊に向かって駆けた。その速さは少女のものではなく、それどころか人のそれでもありえないものだった。ルイスはその体を引きとめようとして、その速さに追いつけなかった。

「アーシエラ…！」

声を上げるが、それはアーシエラには届かない。その姿を追いかけようと駆け出した瞬間、手を捕まれ引き止められた。反射的に振り返った先にいたのはクレイル。

「行って…どうするんですか？」

「どうって…何言ってるんだよ！アーシエラはっ…！！」

つかまれた手を振りほどいて、クレイルに食って掛かろうとしたところで、言葉が詰まった。

「まさか…アーシエラが？なんで…どうしてだよ！」

気がついてしまった。アーシエラが新たな聖乙女になったのだと…気がつけども、納得できるものでもない。

「彼女が自分で選んだんです…」

「嘘だ…なんであいつがそんな事選ぶ必要がある!？」

クレイルの言葉に間髪要れずに怒声を返す。

「死なせたくないからですよ…貴方を」

射るようなきつい眼差しがルイスを捕らえる。その瞬間、言葉を失った。

「ここに来た時の様に何も知らないで選んだわけじゃない……聖乙女という存在の全てを知った上で、彼女はそれを選んだんです」

「…なんでっ」

それ以上、ルイスは何も言えなくなる。あの普通の少女が、どうしてそんな道を選ばなければならなかったのか…どうしてそこまで追い込まれたのか、わからなかった。

ただ尚更にここにいられないと思った。だからクレイルに背を向けそのまま駆け出す。

「どこに行くんですか!」

背中にかけられたクレイルの声に返事も返さず、ルイスはアーシエラの駆け出した方へと向かった。

向かい来る悪魔の残党を倒しながらアーシエラを追う。けれど普通の人間であるルイスにとって、悪魔の相手は厳しく、その体は進むたびに傷ついていった。痛みを感じないわけではない、体が重くないわけでもない、それでも歩むことを止める事が出来ないだけだった。

「…つくそ、アーシエラ!」

叫びに近い声を上げる。この声だけでも届けばと思う…もう遅いのだと気がつきながらも、その姿を追う足は止まらない。

その名を呼び続けながら、闇の中を駆け抜けるだけだった。

聖乙女になるには必要なものがある。

神の星の廻りに生まれ、神に愛される容姿を持ち、神を敬愛し、身も心も清らかな乙女でなければならなかった。

ルイスは初めてアーシエラの姿を見たとき、自分の目を疑った。それは聖乙女に必要なものを全て持っていたから……だからクレイルが次の聖乙女にする為につれてきた少女だと瞬間的に悟った。最初はその運命に哀れみを感じていたのかもしれない。

けれど今は違った……哀れみなど無い。一年という期間、少女と言葉を交わし、行動を共にして、アーシエラという人物を知った。素直にそんな彼女を好きだといえる。

だから追いかけていた。本当に自分の為にアーシエラが聖乙女になったというならば、伝えなければならぬ言葉がある。

そんな事をする必要はないのだと……伝えなければならぬ。

駆け抜けた先で見つけたのは、血を流し横たわる悪魔の中、静かにたたずむアーシエラの姿だった。

「アーシエラ」

ルイスの声に振り返ったアーシエラは年相応の少女のものだった。微かにその瞳が揺れている。

「どうして……ここにいるの？」

「あほか、それはこっちの台詞だ。勝手に一人で突っ走って、無茶する奴だな」

呆れたようにため息混じりにそんな言葉を吐くが、そんな言葉を口にするルイスの体の方がアーシエラよりずっとぼろぼろだった。

「こんな……傷だらけで、どうして追ってくるの……」

泣きそうな目をして顔を伏せたアーシエラに、言葉が詰まる。少しだけ考えた後、その頭に手を置いて答えた。

「そんなもん……お前が仲間だからに決まってる」

ルイスは聖乙女の定めを全て知っている。だからこそアーシエラに向けた言葉はそんなものだった。

「どうして…」

何か言おうとして、途中でアーシエラの言葉は止まった。それ以上何も言えなくなる。

「一人で戦おうとするな、もっと他の奴等を頼れ」

言い聞かせるようなその言葉に、アーシエラは顔を上げる。いつものように笑うルイスの顔が目映った。

「ルイス…私…」

言葉を続ける前に、それは斬撃に打ち消される。アーシエラの眼前が赤に染まり、飛び散った血液が白い服に顔に跳ねた。

「あ…あ…」

喉が潰されてしまったかのように声が出なかった。ただぐらぐらと揺れる視界で斬撃を受け倒れるルイスの姿を捕らえる。赤く染まった身体、その影から見えた一人の悪魔。

「あああああああああああああああ！！！」

アーシエラが叫び声を上げ、剣を振りかざす。何の躊躇いもなく悪魔の身体を切り裂いた。あふれ出した血がアーシエラの身体を汚したが、そんなものは気にもならない。

ちぎれた悪魔の身体をそのままに、アーシエラはルイスに駆け寄る。

「ルイス！ルイス！！」

倒れた身体に手をかけ名を呼ぶ。うつすらと目をあけてアーシエラに目を向けたルイスは、薄く笑う。

「なんて顔してんだよ…」

力なく笑うその姿に涙が止まらなかった。

「どうして？私は力を手に入れたの…こんな傷ぐらいつ…」

いくら聖乙女といえど、人の傷を治すことは不可能だった。命を操作することなど出来るわけがない。

「アーシエラ…もういい、だから泣くな」

「よくない…よくないわよ！」

ルイスが死んでしまつてはアーシエラが力を得た意味がなくなつてしまふのだ。だからこそ現実を否定するように必死に首を振る。

「お願い…お願い…助けて」

誰に祈るでもなくアーシエラは泣きじゃくる。嫌だと思って、全てを捨てる覚悟をして手に入れた力なのに…役に立ってはくれない。

「アーシエラ」

名を呼ばれ、ルイスに目を向ける。そつとアーシエラの頬にルイスの手が触れた。

「お前は…自分の為に戦え、自分が正しいと思った事を貫けばいい…誰かのためになんて…戦う必要ないんだ」

もう遅いとしても、それだけは伝えなければならなかった。それが遠い未来になろうとも、アーシエラが自分でそれを選ぶその時の為に…

「ルイス…ルイスっ…」

言葉が出てこなかった。どうすればいいのかわからなかった。助けて欲しかった。

「忘れんなよ…お前は、自分の為に…戦えば…いい…」

糸が切れたようにルイスの手がアーシエラの頬から滑り落ちた。目は閉じられている。もう二度と…開くことは無い。

「うつ、あ…あああああああ！！」

小さな子供のように声を上げて泣いた。何も考えず、ただその涙が枯れるまで泣き続けた。

きつと暫くの間立ち直れない程にアーシエラは塞ぎ込むだろうとクレイルは思っていた。

けれど現実とは違った。ルイスの亡骸と共に帰ってきたアーシエラは酷く落ち着いた顔をして、ルイスを弔い、普段通り神に祈りを捧げていた。

「アーシエラ」

天使の像に跪くその姿に声をかければ、静かに立ち上がる。

「今回の事…私の責任でもありません、一人で追わせるべきではなかった…だから」

「クレイルさん」

謝罪のようなその言葉を遮ったのはアーシエラの呼びかけだった。

「マリア様は…どうなさっていますか？」

その口から出てきたのは全くもってクレイルが予想していなかったもの。まさかアーシエラがそんな事を今聞いてくるとは思わなかった。

「…元気です、記憶は…無くなってしまいましたが、それでもいつも笑っています」

「なら…よかった」

振り返ったアーシエラの顔に浮かんでいたのは笑顔だった。目的を失ってしまったはずのアーシエラは、信じられないくらい綺麗に笑っている。

「クレイルさん…私はこの闘いを終わせます、悪を最後まで追い続けます。神の為だけに…戦い続けます。それが私の…誓いです」

言い聞かせるような言葉だった。事実それはアーシエラが自分自身に言い聞かせた言葉だったのだろっと思う。だからクレイルはそれ以上何かを言うのはやめた。

「出来る限り…手伝いますよ」

手を差し伸べたクレイルに笑みを返す。少しだけ戸惑った後、アーシエラはその手を取った。

この日から、アーシエラにとって戦う理由が変わった。

たった一人だけを護りたかった…その為に手に入れた力。けれどその護りたかった一人は護れず、意味を失ったアーシエラは自分を誤魔化した。

『元より戦うのは神の為…それこそが私の生きる意味』

それから一日たりとも、自分が同士であつた者達の屍の上に立っているという事を忘れた事はない。だから…その誓いを、剣を簡単に置く訳には行かないのだ。

薄暗い部屋の中、アーシエラは目が覚めた。

どれほど眠っていたのだろうか…、そう考えたが実際にはそんなに長く眠っていなかったのかもしれない。目が覚めた風景は、眠ってしまった時のそれと変り無かつた。

懐かしい夢をみたと思う。本当に、遥か昔の事だというのに掠れもしない記憶。それを思い出す度に、アーシエラは胸が軋んだ。

あの思いは何だったのか…それは今でもハッキリしない。幼すぎたのかもしれないとアーシエラは思う。もうそんなはずはないというのに、今もまだ分からないままだった。

(…私が、戦う理由…)

それを考える度にルイスの言葉とフェルデナントの言葉が頭の中で繰り返された。

(私は…多くの屍の上に立っているの…：簡単に全てを捨てたりは出来ない)

戦い続けたその結果、当然とも言える犠牲者が沢山いる。アーシエラが戦い続けると決めた時から、それは避けて通れない道だった。

(私が全てを捨てたら…何も残らないじゃない！)

暗闇の中アーシエラは一人で頭を抱える。

捨てる事は出来ない。けれどカルネラの様な悪魔を狩る事も出来なかった。

「私は……」

どうする事が正しいのか分からない。正しい道など本当はないのかも知れない。それでも自分の心だけは決めなければ前には進めなかった。

（……傷）

不意に頭の中にフェルデナントの傷が浮かんた。アーシエラを庇って出来た傷……それは思いがけない行動だった。互いに利害の一致だけで共に行動してただけで、護る理由など何一つ無かったというのに……

「……理解できないわ」

フェルデナントは借りがあつたから返ただけだと言った。けれど、それよりも以前……夏樹と対峙した時もフェルデナントはアーシエラに手を貸そうとしていた。

「借りがあるのは……私の方よ」

口にして、はじめてアーシエラは自嘲したものながら笑みが浮かぶ。「……もう誰もいない。あの頃の皆は……だからルイス、貴方の言う通り自分の思う通りに、剣を取ってもいいかしら？」

静かに立ち上がる。真っ直ぐと前を向いて心を決めた。

何が正しいのか……どうする事が最善なのかは分からないまま……けれど今の自分の心だけは決まった。

「主よ、お赦し下さい……」

今だけは、貴方に祈る事は出来ない。その言葉だけは口にはしない。ただ跪くのも手を組む事もその時はしなかった。

Take 9 Prayer

カルネラの声は一足遅かった。否、声が間に合っていた所でそれは変らなかつただろう。

「キヨウスケさん!!」

叫び声を上げてカルネラが倒れた京右に駆け寄った。倒れたままの京右の顔は血で赤く染まつている。それが死を連想させて、カルネラは泣きながら首を振った。

「いやっ、いやっ、嫌、嫌!!」

その否定は気がつけば叫びにかわっていた。そんなカルネラの様子を顔色一つ変えずに見ている黒服の男。京右の首を引き裂いたのも当然その男だった。

男の動きに気がついた瞬間、声を上げたカルネラは、当然京右を庇おうと駆け出そうとした。けれど男の動きは一瞬。カルネラは歩たりともそこから動けなかつたのだ。

「まだ生きてるみたいだな少年は…止めを刺しておくか?」

無情にも男の声がカルネラの背中にかけられる。ゾクリと背筋が凍った。先程も全く動く事が出来なかつたのだ…抗つても勝てる訳ない。

「…っ、あ」

助けて欲しかつた。誰か、誰でもいいから…京右の事を…

まだ完全に暖かさを失っていない京右の身体。それがカルネラにとつては唯一の救い。まだ契約が切れていないのだと身体で感じる事が出来た。けれど…このままでは遅かれ早かれ死んでしまう。

「止め、て…この人を…殺さないで」

カルネラにとつて、それは命に代えても守りたいものなのだ。どれだけ祈りを捧げて、どれほど大きく叫んでも誰も救ってくれなかつた。それを始めて救ってくれたのが京右…だから失いたくはない。

「お願い……」

勝てるわけは無いと思う。それでも抗う事しか出来なかった。はじめからカルネラにとってそれ以外の選択など無い。

だから願った、神ではない何かに…

「Saving to the Satan!」

それは意図せず口から出る言葉。神に祈れぬ身ならばと声にするもの。

そしていつも……カルネラは悪魔としての姿を見せる。

「…これは、予想外だ。興味深い」

慌てた様子もなく男は喉を鳴らす。本当に面白がったのだった。「それは契約者を得たからの姿なのか、それともその前からの姿なのか…是非聞かせてもらいたいな、返答によつては用なしでもなくなるかもしれないが？」

「貴方に話す必要なんて無い」

男の言葉をピシヤリと断つたのはカルネラ。その姿はもう普通の少女とは言いがたいものになっていた。

「不完全であるはずのお前が、何故そんな姿になるのか…」

その姿は…黒い翼を持ち、二つの角が頭に生え、その両腕が醜く変形し、体全体に刺青のような模様が浮かんでいる。悪魔のものだった。

「貴方に話す必要なんて無いって言った！」

怒鳴りつけたカルネラは次の瞬間男に向かって駆けていた。もちろん殺すために。

「是非、無理やりにでも聞かせてもらいたい」

カルネラが殺すはずだった男は、一瞬でその姿を消し少し後ろに移動する。その動きがカルネラにはまたも見えなかった。

ひやりと冷たい汗が背中を伝う。けれどすぐに頭を切り替えて男に切りかかった。

カルネラの両腕はナイフのような鋭さで空を切る。おそらく触れれば鉄をも切り裂くであろう。だがそれも、触れられなければ意味がないのだ。

「っ、く」

男はいとも簡単にそれを避ける。それがカルネラの焦りを強くした。早くしなければ…早くこの場から京右を連れていかなければ…京右が死んでしまう。

「早く、早くしないと…」

気ばかりが焦っていく。焦っていてもどうにもならない事は分かってきているのに…もっと冷静になれと自分に言い聞かせているのに…どうしてもそれが出来なかった。

失ってしまう事が怖い。

また一人になってしまう事が怖い。

知ってしまった温もりを手放すのが怖い。

「お願い…誰か…っキョウスケさんを助けてっ…!!」

浅はかだと知りながらそう声を上げて願ってしまった。

助けて欲しいのは自分ではない。だからどうか…どうか助けて欲しいと…空を見上げた。

「…!!」

空を見上げたカルネラの視界に映ったのは、丸い月と、見知った白い影。

ふわりと風でも纏っているかのように地面に降り立った影は、振り返って綺麗に笑った。

「大丈夫？カルネラ」

銀の髪を揺らしながら影は優しい目を向ける。それに力が抜けて、カルネラはその場にへたり込んでしまった。知らず目から溢れ出した涙が頬を伝う。

「…っ、う…フィル、ネスさん」

そうしてやっとその影の名前を呼べた。

「キョウスケさん、キョウスケさんがっ…」

「うん、わかってるわ…」

泣きじゃくるカルネラに、静かな落ち着いた声が返される。それはどこか怒りを含んだ声だった。

「貴方のお名前：聞いておこうかしら」

踵を返して男に向き直ったフィルネスが、鋭い目付きのまま声をかける。

「名乗るほどのものでもないが……」

馬鹿にしたように肩を竦めて笑う男に、フィルネスも笑みを返す。

「あら、聞いておきたいじゃない……」

暗がりの中、フィルネスの紅い目が鈍く光を帯びる。

肌をビリビリさせる殺気を溢れさせながら、低い冷たい声が喉から発せられた。

「今からアンタを殴るんだから」

言うが早いかフィルネスは地面を蹴り、数メートルはあつた男との間合いを一気に詰める。それに対して驚きもせず、男はフィルネスの拳を受け流す。

そのままの勢いでフィルネスの拳は、男の後ろにある壁へと打ち付けられる。それと同時に派手な音がして、コンクリートの壁が元より柔らかいものかのように砕け散った。

「ごめんなさい……私、ちょっと人より力が強いから……当たら死ぬわよ」

ゆつくりと男に目を移したフィルネスの冷たい声は、笑っている。

それが何よりも本気なのだという事を表わしていた。

そしてそれに返事を返すように、男も口元を歪めた。

「それは……お手並み拝見といこうじゃないか……夜の姫君」

アーシエラがやつと外へと足を踏み出した頃には、辺りは暗闇に包まれていた。

「…とりあえず、シルアやヴィグルのところへ戻らないと」

何よりもまずそれが先決だと思えた。事実それが一番いい選択なのだと思う。

けれど、顔を上げたアーシエラの目に映ったのは…忘れもしない少女、百々撫の姿だった。

「ごきげんよう、乙女様…」

分かり易い作り笑いのまま百々撫はアーシエラへと足をすすめる。

「何か…用？」

「あーら、随分と立ち直りの早い事…それとも元々神様なんて信じてなかった？」

アーシエラの短い返事に、百々撫は不満気に悪態を吐く。それをアーシエラが気にした様子はなかった。

「貴方には無関係だわ…用がないなら消えて頂戴」

「アンタやっぱ馬鹿ね、アタシがアンタを殺そうとしてた事忘れたの？」

大袈裟に溜め息を吐きながら歩み寄ってくる百々撫は、隠し持っていたナイフを取り出し、くるくると手元で遊び始めた。

「アンタが死んでくれないとーこっちは凄いい迷惑なわけ、分かる？」

けだるそうな声がアーシエラの耳に届くが、アーシエラは微動だにしない。

「そう…貴方が私を殺すというのなら、私は全力で貴方から逃げるわ」

それまでのアーシエラであれば絶対に口にしなかったであろうその言葉に、少なからず百々撫も驚き、目を見開く。

「へえ…アンタがそういう事を言うなんて意外…」

「ええ、私もそう思うわ…不思議な話ね」

素直に驚きの声を上げた百々撫に、アーシエラは同意したように薄い笑みを浮べた。どうしてこんなにも心は穏やかなのだろうかと思

う。

「でも残念…それを許すわけにはいかないのよ！」

言葉と同時に駆け出した百々撫は、迷う事なくアーシエラにナイフを向ける。

「そう、残念ね…私にも、譲れないものはあるわ」

百々撫のナイフを避けながらアーシエラはゆっくり後退していく。人を傷付ける事が出来ないアーシエラには逃げるしか方法がなかった。けれどそれに迷いはない。

「今回はあの男、助けてくれないんじゃない？」

「…誰も、助けて欲しいなんて言っていないわ」

空を切るナイフがアーシエラの眼前で鈍く光る。恐れる事なく、アーシエラは確実にそれを避け続けたが、ずっと後退を続けていたその足が壁につき、もう後ろには下がれない事を知らせた。

「あらそう…じゃあどうするの!？」

百々撫が振り上げたナイフがアーシエラに振り下ろされる。

瞬間、百々撫はアーシエラを殺せると思った。

けれど…何故か腕はいつまで経っても振り下ろされない。

「…な、に？」

呟くようなその声は何故か掠れ、顔は歪んでいた。

百々撫は確かに腕を振り下ろそうとした…そう頭で意識した…けれど、それは届かない。どうしてか、それは百々撫の右腕が肩からバツサリ無くなっていたから…

「…っ、痛ああっ!!な、なんでっ!？」

自分の肩に目を移して、やっと百々撫は声を上げた。地面には無造作に切り落とされた右腕が転がっている。百々撫には、自分から離れてしまっただけで、それが酷く気持ち悪く見えた。

「痛い、痛いっ!!やだあ…」

子供のように涙を流しながら、百々撫は否定するように首を振る。

「…貴方は」

そんな百々撫を暫く呆然とみていたアーシエラだったが、ふと我に

返ったように顔を上げた。

そこにいたのは、黒い影。

「聖乙女、あんたに聞きたい事が二三あるんだが…」

「…そう、私もちょうど話が合ったわ」

慌てる事もなくアーシェラは黒い影、菜月に向き直る。少しだけ順番が狂ってしまったけれど、それを構わないとアーシェラは自分の心の中で容認した。

必要なのだ…教会でないものの力が…

冷たい風が頬を掠めた。体を凍えさせるはずのそれが今は気にならない。

カルネラは京右の体を抱きしめながら、目の前で起こるそれをずっと見ていた。

「驚いた…アンタ、そんな体してたんだ……」

フィルネスがまるで悪態を吐くように、眉をひそめる。フィルネスが男を殺そうと振り下ろした拳は、あるうことか片手で受け止められた。そしてそれとは逆の手は醜く姿を変え、フィルネスの腹を貫いている。

「誰にも教わらなかったか？油断は禁物だと…」

小さく笑った男が突き刺した腕でフィルネスの腹を引き裂いた。紅い血液が地面を汚し、切り裂かれた腹からは臓物が見える。

「お生憎様…誰にも教わらなかったわ…」

けれどそれだけでは、人間ではないフィルネスが死ぬ事などない。そんな傷は時間をかければ治るものだった。

「さて、お前を殺す方法を教えてくれないか？」

「あら…残念ね、そんなものないわ…だって私はヴァンパイアだもの」

よろめいたフィルネスを見下ろす男は、小さく首を傾げる。それに対するフィルネスの返事は茶化すような音を含んでいた。

「古臭い伝説のヴァンパイアじゃないのよ？…銀も、木の杭も、十字架も、日の光も恐れない」

フィルネスのその言葉は真実。

長い時間をかけて人間が進化したように、それらもまた進化は続けている。

「けれど、本当に不死身な存在などありはしない」

男のその言葉も真実。

この世に不死であり、不死身な存在があるのだとすれば、世界は遠の昔にその存在のモノになっているはずだろう。

「再生出来ない程に刻めばいいか？それとも存在そのものをココから消せばいいか？」

「…っ！？」

男の腕がフィルネスの首に伸びる。紙一重でそれを逃れるが、銀の長い髪がハラハラと地面に落ちた。

「女の腹に腕を入れた挙げ句、髪までバツサリなんて…ちょっと最低すぎるんじゃない？」

「それはどうも、褒め言葉として受け取っておこう」

怒気を含んだ声に、柔らかな返事が返される。

「…ああそう、今のは本気でイラつときたわ」

未だに体からは血が流れ続けているが、フィルネスはそれを気にした風もなくゆらりと立ち上がった。

「偽物風情がよくそんな口聞けたわね…身の程つてのを教えて上げる」

フィルネスが地を蹴り男との距離を詰める。一瞬でその間合いを無かったものにし、振り上げられた腕が宙を切った。風を切る音が耳に響く。その腕に肉の感食はない。

その斬撃を躲した男は、ひらりとその後ろを取る。が、それも一瞬、フィルネスは体を反転させながら男に向かって足を振るう。男はそれを避ける事無く、今度は受けとめた。

「いい、反応速度だとは思うが……鈍ったんじゃないか？」

「あら、貴方こそ少し悠長なんじゃない？あたしが誰だか…知らないわけじゃないんでしょ？」

フィルネスが薄い笑みを零し、その紅い瞳をぎらつかせた。冷たい風が頬を吹きぬける。フィルネスから伸びた黒い影が地を這い、男を取り囲む。

「あんたに本物…見せてあげるわ」

黒い影はまるで炎のように揺らめき、地から這いでくる。黒い影が男の体を足元から取込んでいく。

「あなたの存在…消して上げる」

黒い影は無の象徴。それに飲み込まれたものは全て無に帰る。存在の消失だった。

「存在の消失…くつく、残念だ」

静かに喉の奥で笑った男は、黒い影を振り払おうともせずただじつと立っている。

「元より存在しない俺には意味が無い」

「な、に…？」

一瞬耳を疑う。眼前の男の言葉の意味が理解できなかった。

それでも直感的に理解する。この男に闇に称されるものの攻撃は効かぬのだと…

「残念だな、夜の姫君」

無駄だと悟り、黒い影はフィルネスの足元へと舞い戻る。それを当然のように男は静かに受け入れた。元よりその結果が分かっていたかのような素振り。

「あんだ…女には嫌われるタイプね」

「それも褒め言葉だな…」

知らずフィルネスの口から舌打ちが零れる。なんて事だろう、打つ手建てが無くなってしまった。

このままでは自分やカルネラはまだしも、京右は確実に死んでしまふ…そう考えて焦る。焦るが良い答えが見つからない。

「……夏樹」

祈るように呟いた声に返事はない。返事はないが、その眼前を青い光が包んだ。

「！」

その場にいた全員が驚いて光の方向に目を向ける。

そこにいたのは、白い絹を纏う一人の少女。アーシエラの姿だった。

「お前は…」

怪訝な表情を浮べたのは男。アーシエラの姿を見てすぐに百々撫はしくじったのだと思う。

「そんなに相手が欲しいのなら…私が相手になるわ」

「…それは残念ながら遠慮したい」

真っ直ぐと男を見据えたアーシエラに向けられたのは、薄い笑みと嘲笑いに似た声だった。

「今回は、身を引かせてもらおう…では、また後日」

まるで暗闇に溶け込むように、男の姿は消える。その場にいる者全て、それを追おうとはしなかった。それよりも何よりも、やらねばならぬ事があるからだ。

「…あ、あ」

目の前にふわりと舞い下りたアーシエラに、京右を強く抱きしめながら、カルネラは恐れを帯びた声を漏らす。

「大丈夫…貴方達を殺したりしないわ」

その場に跪いて、アーシエラは薄く笑った。それに目を見開いて言葉を失う。

「でも、私には傷を癒す力はないの…だから……」

京右のその様子を目に、アーシエラは少しだけ眉を潜める。まだかるうじてある息は微かなもので、いつ途絶えてもおかしくはない。

「…京右を隷属にするわけにもいかない……ともかく病院だな」
考える時間が惜しいといったふうに、菜月は呟いて、カルネラから京右の体を受け取る。

「キヨウ、スケさんは…」

じつと京右を見つめたままのカルネラは、嗚咽のせいで上手く言葉が出てこない。

「カルネラ、よく聞いて」

放心状態に近いカルネラを我に返すように、フィルネスがその肩を少しだけ強く掴む。

「カルネラの負った傷が京右にも跳ね返ると…そう言っていたわね。だったら、京右の傷をカルネラが請け負う事も出来るはずよ」

「へ…？」

不完全だと思われたカルネラは、何故か完全に悪魔の形を得ている。だからこそ口にした言葉だった。完全とはいえずとも、それに近い状態なのであれば、不可能とは言えない。

「全て請け負わなくて良い…少しで良いから、試してみて」

「でもっ、私そんなこと…！？」

「助けたいんでしょ！」

出来ない、言いかけた言葉はフィルネスの怒声に遮られた。

「やる前から無理だなんて言わないで！それともカルネラは坊やの命諦めるの！？」

「…！」

もうずっと諦めていた。本当は諦めきれなくせに、諦めようと言い聞かせてきた。

でもそれじゃあ、ずっと何も変わらない、何も救えないとカルネラは知った。

京右に出会って、それがどんなに無価値な事か知った。

救って貰った。だから今度は自分が救うのだと決めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7895c/>

exorcism - illusion deity -

2010年10月10日05時20分発行